俳句雑誌

水明

2021 6月号

令和三年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第六号

《今月のかな女》

寝惜しみて母とありけり螢籠

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

梅雨に入った某日。湯に入り、火照る身体を冷まして床に着いたがなかなか寝付けない。今日ひと日の出来事や、俳句の仲間のことなど、いろいろと思いを巡らしていると、行き着くところは母のことであった。枕元に置いてある籠の螢火が、母の言葉のように、優しく瞬いている。

（鬼之介・註）

水　明

第1089号

――華の一句――

アンニュイと呟いてみる花曇

清水桂子

フランス語は格好良いが、発音が難しい。もしも女から日本語で、『ああ怠い』と言われたら、相手の男はどう反応するだろう。芽生えていた恋心も冷めてしまうかも知れない。ところが、ｅｎｎｕｉと、鼻にかかった声で言われたとしたらどうだろう。たちまちの内にノックダウンであろう。

（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
６月号

華の一句		1
鬢付け（作品）	山本鬼之介	4
庭の花づくしⅢ（近詠）	永野史代	6
ドラマ館（近詠）	大村節代	7
風知草　雪欄作家近詠鑑賞	松井由紀子	8
硯箱　季音月評	井口俊晴	10
季音「雪」（同人作品）	西山貴美子　波多野寿子　星野和葉　ほか	12
季音「月」（同人作品）	宇田白鷺　丸山マスミ　鳥羽和風　ほか	18
季音「花」（同人作品）	大塚茂子　井上玲子　近藤徹平　ほか	23
『水明誌』を繙く	大石雄鬼	28
俳誌望見	梅澤佐江	29
現代俳句鑑賞	網野月を	30

水明忌　32

水明集　染谷正信　反町修　原田秀子　ほか　36

水明集作品評　山本鬼之介　50

水琴窟（水明集四月号鑑賞）　池田雅夫　54

山紫集　56

鼓笛集（同人作品）・私の一句　62

句集喝采　近藤徹平　65

水明例会報・各地句会報　66・69

全国大会のお知らせ　74

夏季競詠　75

夏行のご案内　76

風声・水明発展基金御礼　78・79

後記　80

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

鬚付け

山本鬼之介

国道に優る村道みどりの日

チェロを負ふ少女五月の森の径

小間物の老舗けふから夏暖簾

地毛で結ふつぶし島田よ三社祭

北前船の通ひし灘や初鰹

揺り椅子の余韻薄暑の昼下り

夏めく沼を処女航海の模型船

この里に白蛇伝説夏がすみ

庭の花づくし他Ⅲ

永野史代

パン焼いてふくらんでくる桃の花

イーストの機嫌・不機嫌養花天

十二単庭のまはりをしづしづと

アネモネ咲かせ思ひ出せない花言葉

わたくしを踏まないで踏まないでと菫

透きとほる紗一師の好きな柿若葉

水温む男所帯の洗ひ桶

　草木や花々の輝く素敵な季節なのに家籠り。コロナの所為である。賑やかになったのは厨。以前よりパンを焼くことが増えた夫。食パン、干葡萄、無花果、胡桃入。バゲット、餡パン、そしてkouglof（クグロフ）。私は食べる担当⁉と他の食事作り等。クグロフは仏・アルザス地方の伝統的な菓子パン。大きな型は昔、仏から送った。焼き上がれば、冷えた軽くて香り高いアルザスワインと一緒に食べるのが最高!!

　こんな日常であるが、詩を詠むことも心を癒してくれる。外出も儘ならぬ日々。水明誌発行の為のご尽力をされている主宰、編集、運営ほか大勢の方々に感謝。厚く御礼申し上げます。

〝輪廻転生庭一斉に芽吹きだす〟

史代

ドラマ館

大村節代

春の風あつと言ふ間のモノレール
吉宗の植樹の桜仰ぎ見る
風光るこの木何の木名札欲し
四阿で笛吹く男のどけしや
ふらここの園児手を振る母も振る
デゴイチに風の子あまた散る桜
変身の渋沢栄一春深む

渋沢栄一翁がＮＨＫの大河ドラマや一万円札になるとかで、何かとかまびすしい。ある日の事、栄一の居宅のあった飛鳥山で「渋沢栄一展」が開催されていると聞く。

ＪＲ王子駅前の飛鳥山は標高二十五、四米の小山で、モノレールに乗ると二分程で山頂に到着した。

博物館に入ると、いきなり吉沢亮の大パネル、見渡すと会場はすべて「青天を衝け」の衣裳や出演の俳優の写真ばかり、びっくりして入場券を見直すと「大河ドラマ館」になっている。私は自分の不明を恥じた。それでも「何だ、それなら一万円札の顔も吉沢亮にすればいい」とぶつくさ言って帰途に着いた。

風知草

◎季音雪欄作家近詠鑑賞

松井由紀子

◇甲羅酒（三月号）

大橋廸代

鍬始まづは土竜を鷲摑み
ずわい蟹のタグに津居山吉野丸

豊作を祈る神事鍬入れで土竜を手摑みにしました。新しい年の農事への意気込みが壮快です。ずわい蟹、青いタグには津居山のブランド銘が、甲羅酒はさぞや美味だったことでしょう、羨ましい贅沢の極みです。

白黒と名付け米屋のかじけ猫
蝉氷仮死のメダカを救ひけり
風花や籠さげインコ捜す美女

猫たちはペットだけの存在ではありません。農家も商家も彼らを鼠駆除の役を担う働き手と見做していました。名前も黒、白、虎、三毛など符号のようで、寒い日は竈の灰の中や納屋の積藁にもぐっていたり薄陽の軒下で悴けていました。メダカの凍死を救ったのは薄く張った氷。わらべ唄「氷（しが）こも張れば――天井こ張ったと思うベナ」を思い出します。風花、インコ、美女、カラフルでどこかあっけらかんとした面白さです。実は寒風の中おろおろと逃げた鳥を捜しているオバサンかも知れませんが。

◇仕立て方の本（三月号）

星野和葉

姿なき邪魔の入りぬ探梅行
切り株に人待ち顔や紅白梅

梅の園に立たれた作者は忽ち以前お二人で賞でられた探梅の思い出に囚われたのでしょう。姿なき邪魔とはご自身の心に在る深い哀惜の想なのです。切株もその方のために用意されなくては。喪失感はなかなか癒されません。

抜ける青空広がりてこそ梅真白
盆梅の蕾の個々に史の流れ
盆梅の仕立て方本繰られずに

これらのお句も挽歌と推察いたしました。翳りのない空ありてこその満開の梅、二十年咲き続けた盆梅その年々の記憶、

遂に開かれなかった仕立て方本。私も共感しきりです。因みに私の盆梅は地植えとなり手入れは植木屋任せです。

◇風に形（四月号）

吉住光弥

水仙や新陰流の末裔風を斬る
狐橋春のお百度風に艶

お手並み鮮やかなお句。古流剣術の太刀筋の気魄に水仙の香気が漂い清々しい緊張感があります。春のお百度参りは何を願うのでしょう。狐橋は風も艶めきちょっと妖しげ。もしや「公達に化ける」とでも。

ゴスペルの重くしなやか白椿
立春と聞けばその気に玉子焼
梅紅白風に形の生れたる

神に捧げる祈りを全身全霊で歌い苦しみも嘆きも愉悦に転化するゴスペル、まことしなやかで力強い歌声です。真白いローブをまとったゴスペルコーラス、大輪の白椿も諾えます。その気になって玉子焼とはなんと柔らく微笑ましい。風に形、自在な表現は抽象画のようです。光琳の紅白梅図がふと浮かびました。

◇花菜漬（四月号）

栢尾さく子

能楽堂春爛漫の待たるる日
春昼の仄暗き部屋双鶏図

靖国神社の能楽堂では例年夜桜の薪能が催されていました。作者はそれを心待ちにされたのでしょうか、篝に映える桜はさこそですが能舞台の花は夢幻の奥にひろがっています。仄暗く静かな美術館で若沖の名画と相対されたのでしょう。至福のひとときです。

花菜漬箸も会話もはづむ朝
梅咲いて五合目の旗さわがしき
次次と尻餅すべる芽吹き山

白いご飯と花菜漬お美味そうです。朝の食卓の明るい会話健やかな一日が約束されるようです。梅を見に行ったら観梅ツアーのグループに出合いました。見頃の梅は五合目辺り歓声の賑やかなこと！雨上がりの山道は滑りやすい、ユーモラスな場面をお句に。どのお句も軽やかで易しい。作者は今、気負いのない穏やかな眼ざしを対象に向けてまるで茶の間でのお話のように句を詠まれているのです。

硯箱

◆季音四月

井口俊晴

春寒し揉み手絶やさぬ青物屋　五明　昇

春は名のみ、寒い日が続く。散歩ついでに駅前商店街の青物屋を覗いてみると、親爺が店の入り口に立っていた。赤ら顔で威勢のいい五十年配だが、寒いのか、しきりと手を擦り合わせている。それが、まるでお愛想を言いながら揉み手をしているように見えるからおかしくなる。「ええ、きょうのお買い得はカボチャとキャベツだよ」とか何とか言って、お客さんに買わせようとする。こちらもつられて隣にあるナスを手に取ってみたりして…。

歩の先のたんぽぽ一輪金メダル　島津初花

寒いからと家に閉じこもってばかりでは体に悪い。散歩に出てみることにした。ちょっと歩けば、もう田圃が広がっている。歩いて行くと、車もよく通る道だというのに、たんぽぽが健気に黄色い花を咲かせていた。コロナ騒ぎでオリンピックはどうなるのか、それこそ神のみぞ知る状態だが、このたんぽぽの一輪は、まるで金メダルのように輝いて見える。きょうも良い日でありますように。

麦三寸こぞりて育つ田の広さ　井上燈女

時間が経つのは早い。いつまでも明るくならなかった冬が去り、今は穏やかな春の太陽が空高く昇っている。ちょっと田圃まで行ってみると、麦が三寸ほどに伸び、そよ風を受けてなびく姿は、まるで青い絨毯を敷きつめたようだ。ついこの間まで麦踏みをしていたのが嘘みたいだ。後れを取らぬよう、どれも空に向かって伸び、田を埋め尽くしている。麦田の広さを今さらながら知った思いである。

試着室のうぬぼれ鏡春隣　大場順子

春が来ると袖を通したくなるのがワンピース。麻で花柄のプリントなんていいんじゃないかしら。陽気に誘われてブテ

ィックを覗き、気が付いた時は試着室に。壁の鏡を見たら、満更でもない様子の自分が映っている。ほっそりして、冬の間の運動不足の影もない。「うぬぼれ鏡　うつしてよ　可愛いおんなは　どこの誰…」。ごめんなさい。これは以前聴いた八代亜紀さんの歌でした。

キューピーの背に小さき羽葱の花

内田恵子

冬を越した葱が春を迎えると、葱坊主が誕生する。そしててっぺんに花をつけ、畑に整列した姿は、おつむがツンとしたキューピーが並んでいるようでもある。葱坊主ならぬキューピーはほっこりして、ポケモン世代のお人形とはちょっと違ったように感じられてならない。そうだ、子供の頃遊んだキューピーの背中には、緑色のちっちゃな羽があったっけ。

冬枯や琥珀に虫の深ねむり

正木萬蝶

琥珀は太古の植物の樹脂、つまりヤニが、何千万年もの時をを経て化石となったものだ。宝石ではないが、研磨してアクセサリーなどに加工する。この琥珀、蜂や蟻などの昆虫が入っていることがある。運悪く下を歩いていた虫の上に、松ヤニなどがぽたりと落ち、そのまま一緒に琥珀となってしまったものだ。囚われた虫は、その時から何千万年もの深い眠りにつき、冬眠ならぬ永遠の眠りに落ちたのである。

春浅し珊瑚の数珠の若き施主

松井由紀子

朝晩は寒さが残る早春の一日。お寺で法要が執り行われた。参列した人は広い世代にわたっているようだが、目を引いたのは、施主が女性で若かったこと。読経が流れる中、その白いほっそりした手首には、赤い珊瑚の数珠が下げられていた。亡くなられたのは、女性の夫であろうか、それとも親御さんであろうか。いずれにしても、身寄りが少なく、そのために施主となったのであろう。でも辛いことは、きょうでおしまい。いつの日か幸せが訪れますように。

白梅や宮の石狐の眼の憂ひ

松山清子

創建は江戸時代以前とも言われる稲荷神社に、今を盛りと白梅が咲き誇っている。境内にはお馴染みの石狐が一対。これは余談だが、たまに狐と稲荷神を混同する人がいる。でも狐はあくまで神様の眷属、つまり使者である。赤い鳥居と白梅、それに石狐、絵に描いたようなお稲荷さんのたたずまいだ。苔むした狐の眼は、思いなしか春愁に潤んでいるかのようだ。静かな境内に昔話が聞こえてくる。

季音雪

夏近し　西山貴美子

夏近し髪マニキュアを明るうす
レモンケーキしわりと割りぬ四月尽
夏近し鳩は硝子の目をつむる
裸婦像の反り身くつきり花は葉に
春落葉乳母日傘のまま老いぬ

花馬酔木　波多野寿子

あをぞらは夢の色かも蘇枋咲く
花馬酔木さらさら風の過ぎゆけり
遠き日の思ひほのかに牡丹の芽
春夕べ音色さびしきオルゴール
落花浴び命の重さ思ひをり

長屋門　星野和葉

長屋門並ぶ道筋囀れり
長屋門の不開の扉鳥雲に
鳥居なきここが入口鳥雲に
切り込みのある糸尻よ春深し
貝塚の埋もれしままに春深む

行く春　茂木和子

急ぐなよ桜ちらしの雨もよひ
花わさび言葉少なに別れけり
行く春や無口黙食土親し
ものの芽や笑顔に光る糸切歯
一斉に柳絮の飛ぶは一揆なり

桃の花　矢作水尾

山々の襞まで甲斐は桃の花
昭和史の思ひ重なるみどりの日
一憂の去れば一憂桃の花
エアメールポストに落とす花の昼
抽出しにあの日の淡き桜貝

春籠る　山中みどり

新緑が喚声無人の遊園地
エチオピアの珈琲甘き春籠る
茹で上げし空豆の匂ひ禁足令
白蜜と黄粉墨堤の蓬餅
緑さす土香りけり百花園

花の雨　由良ゆら女

艶をます虎の子渡し花の雨
花の雨悪夢のままに朝が来て
まろび寝て天と私と苜蓿
告天子地球すつぽりCO_2
ひばり落ち野に耳鳴りの甦る

花衣　吉住光弥

修羅も娘(こ)に畳みて残す花衣
花衣ぬぎても暫しはな浄土
亀鳴きしと思ふ古文書伏せ字にて
桜烏賊と呼ばれし誇り花とせん
珍本を開くときめき春の夜

陽炎　網野月を

思ひ出すのは後ろ姿よ桜貝
春の雨実家は更地に風の末
岩紙鋏の決める席順穀雨の宴
春愁ひ財布の中の英世かな
かげろふや我が身隠してしまひたい

シナモン　石井喜恵

後継を待つのれん三代桜東風
珈琲に散らすシナモン花曇
コートの衿立てた横顔花の雨
耳さとく亀鳴く夜の雨の音
鬩ぎ合ふ潮の間合や桜鯛

野良猫　石山かつ子

踏青や橋なき土手をどこまでも
落款の志功の女春深し
白桃や野良猫母となるかたち
口上は小意気な少女春まつり
優美なる尼僧に逢へる桃の花

花吹雪　大橋廸代

勤行や泡よりぽとりぽとり蝌蚪
山ざくら私もぞもぞ羽化しさう
くわんおんの裳裾にけさの花吹雪
十王堂のぞきし鼻梁花冷えす
花明りコロナ窶れの仁王かな

桜東風　大村節代

墨堤に誰の化身か散る桜
漂流の丸太と遊ぶ花筏
桜東風花嫁の乗る人力車
花の風どこでも止まる村のバス
夜桜や転(まろ)べば大地一人占め

鎮花祭　柏尾さく子

相性の好き木の椅子と桜かな
猫の仔の声して闇の草動く
姫の髪逆立ちくれば鎮花祭
明日葉(あしたば)やさめざめとして母の邑(むら)
優劣もなく吹かれゆく春落葉

春昼　菊池ひろこ

春昼の蔵の薄闇より応（いら）へ
春愁や見慣れぬ小筥みな赤し
濡れ砂に影失ひし桜貝
渚なる光に芥桜貝
桜貝吊り革揺るる江ノ電よ

潮路　五明昇

天翔るかはらけ投げや鰆東風
沖つ波遠流の島の桜貝
花ぐもり波間遥けき沖ノ島
霾るや元寇哀史伝ふ島
亀鳴くや古酒泡盛の酔ひ心地

柳橋　境延昭

春の虹足の一つが柳橋
さくら貝硝子の瓶に異国文字
草笛や土手を親子の肩車
春の塵色とりどりの酒の壜
激流を富士めざすかに上り鮎

壺中の天　椎野美代子

花衣なれば脱ぎたる置き処
八重桜消えたるあとの傷疼く
たがために駆け上りたる花の山
飛花落花張につめてゐる水面
花吹雪壺中の天もまきこんで

八十八夜　　島津初花

葱坊主曇る一日を立ち竦む
蝌蚪生れ光と陰の遊水池
菜園や八十八夜の設計図
八十八夜使ひ古しの四ッ目籠
八十八夜粟粒ほどの雨が降る

花の頃　　鈴木康世

杖の歩の影に躓く花の昼
花ふぶく中へ紛れし吾を見し
目頭に涙一粒夜の桜
胸を衝く一語のありしさくらの夜
覚めてまた一人鏤刻のさくらの夜

行く春　　田寺玲子

鳥帰る紀淡はるかに潮佛
行く春や大和国原山まろし
日照雨過ぐ海風にほふ花の昼
隠沼の時にはばたき春の雁
残照に身を寄せ合ひて残る雁

春の虹　　永野史代

さくらさくら一〇三歳の天寿かな
菅公の無念の声ぞ荒東風す
春の選抜さねさしさがむの球児燃ゆ
春の虹逢ひたき人はなほ遠く
嵩高く落つ菩提寺の藪椿

季音月

沈丁花　　宇田白鷺

仲春の水音はげし鵜の瀬川
笑む人に勿忘草を飾りけり
沈丁花愛別離苦の染み渡る
門灯を消して沈丁なほ香る
山に山重なる八十八夜かな

花衣　　丸山マスミ

大向うの「播磨屋」の声夕桜
花烏賊を躍る男らの胴間声
細き路地海に展くや桜貝
亀鳴けり森の魑魅と遊びをり
城下町に馴染む歩幅の花衣

五月闇　　鳥羽和風

五月闇蠢くものは皆怪し
人の身の忍び音洩らす五月闇
漁火に等間隔の五月闇
人生は躓きどほし五月闇
五月闇仕儀の笛聞く政

初蛙　　森田祥絵

のどけしやインコが餌をくだく音
独り居の電話に笑ひ貝母咲く
山藤に山雨が淡きベールなす
白牡丹崩るる夜の気息かな
香炉の灰ならす夕べに初蛙

息をかく　　渡辺舎人

励ましのどこまで本気万愚節
指に髪絡まし羞づる子スヰートピー
紹興酒は呷り呑むもの菜種河豚
家庭菜園伸ばして愛づる花大根
たんぽぽの穂絮一気に崩す愛

さくらさくら　藤澤喜久

おぼろ月「かぐや姫」住む夢が欲し
色街に目覚めし殿様蛙かな
ふる里の闇やはらかき遠蛙
平成の三四郎逝く花の雲
さくらさくらたつた五文字の「ハハキトク」

ひばり節　小倉倭子

掛軸の志功の菩薩春ともし
姉のやうに慕ふいとこよ桃の花
通院のお洒落なマスク春愁ふ
春の虹所詮叶はぬ絵空事
ああ人生春の川よりひばり節

愛の序曲　柚木治子

プロポーズ今が好機と亀鳴けり
囀りは愛の序曲よ雑木林
安静を強いらるる窓鳥雲に
散る桜礼に参ずるかな女句碑
脇役に徹する女優花菜漬

春日傘　高島寛治

なけなしの一張羅なり花衣
墨汁の滴る大書蓬餅
差し翳す老母の背に春日傘
囀に合はせ奏づる鼓笛隊
子と暮らすことはあるまじ忘れ霜

令和三年春　森本早苗

各各方密避けられよ蝌蚪の池
須磨の浦敦盛桜凛と咲く
行く船の沖に張り付く春霞
土手桜塩昆布入りのにぎり飯
花に酔ひ人様に酔ふ遠出かな

桜　十倉和子

孔子廟天水桶に蝌蚪そだつ
曼荼羅の金泥沈む花ぐもり
文供養会の炎ちろちろ花ぐもり
電車徐行千本桜に沿ふ快楽
本降りとなり届きたる花見鮨

花うぐひ　森川義子

沈下橋越ゆる大河や花うぐひ
それぞれの昭和を語る緑の日
甲斐駒の麓は桃の花浄土
小気味好き甲斐一望の桃の花
桃咲くや母の肩借り一輪車

古歌偲ぶ　原田想子

山吹の径の明るし古歌偲ぶ
玉葱のひげの長短陽のぬくみ
頷くも介護のひとつつつつじ燃ゆ
再会や心にたんぽぽひとつ咲く
のどけしや大樹に鳥語こぼれけり

緑の日　山田美佐尾

逃水や京の街並整然と
からつぽの回転木馬緑の日
木に耳あて水の音聞く緑の日
せがまれて童話聞かせる桃の花
佃煮を買ふや隅田の花吹雪

凧　松宮保人

初蝶の対にあらずや美少年
遠足の列に手を振る老農婦
九十九折見惚れ迷ひし躑躅苑
大空に絆は深き大絵凧
泥の香の風ある八十八夜かな

春の闇　井上燈女

味噌つ歯の子ながら草笛うまく吹く
茄子苗を植ゑて湿りを見逃がさず
新馬鈴薯を甘辛く煮る戦中派
人を恋ひ言葉に飢ゑる春の闇
草萌ゆる弥陀三尊碑の古れり

花筏　大場順子

撫で肩をすべるむらさき花衣
本流へ水に遅れて花筏
花屑を吹き吟行の句帳繰る
琴となる森の原木囀れり
亀鳴くや埴輪は口をあけしまま

桜貝　荒井倶子

春ショール小走りに行く交差点
うどん屋に観桜マップ花曇
桜貝さくら色した稚の爪
川幅は日本一とや麦青む
古書店の主のあくび春闌ける

街薄暑　池田雅夫

浮雲や山容くきり夏に入る
十畳間武者人形の天下なり
落し物さがす道筋街薄暑
山峡の里新緑の照り返し
名にし負ふ泰山木の花どつと

桜　内田恵子

新調の魔女の箒や初桜
ブランドの重たき鞄朝桜
神域の絵馬の重なり桜東風
記憶呼ぶ金継ぎグラス春の果
亀鳴くや判読できぬ古代文字

瑪瑙　町野広子

タイピンの瑪瑙艶めく紫木蓮
爪がよく伸びるなあと夫水温む
辛夷咲き岸を離るる夫の舟
背に嬰括りて飾る武者人形
双方の爺婆招き初節句

囀　川崎道子

囀に新任教師迎へらる
後任に引き継ぎ作業花は葉に
鳥雲に閉校式に村人も
蝌蚪の群解散させる不登校
蝌蚪の群はづるる一匹反抗期

猫の恋　井関礼子

とんぼりの春宵の賑招き猫
恋猫の今も耳奥にせつなくて
少子化の風潮かとも猫の恋
たんぽぽや無邪気と言ふはこよなくて
チューリップ揺らぎ園児を恋しがる

踊るタンゴ　　伊藤敦子

春の宵救急搬送ステープラー
疼く痛みに俯せのまま春暁を
鳥雲に帰る国なき鴉かな
大空を眺めて居りぬ巣立鳥
夫在らば踊るタンゴよ春の月

蛙　　岡野順子

故郷や蛙鳴く田を一望す
蛙鳴く畦道ぴよんと飛び越えて
この坂をここらで休み蛙聞く
川底に蝌蚪の国があるやうな
湧きいづる水の辺りよ蛙鳴く

☆　　　☆

俳句 7月号予告

6月25日発売
予価950円（本体864円）⑩

特別作品　池田澄子・星野高士・山西雅子

大特集
「切れ」の正体
▼総論　「切れ」によって何が起こっているのか…小林貴子
▼各論　切れと文体／現代的な「切れ」の種類／「切れ」の成立／現代「切れ論」の俯瞰／「切れ」の位置からみる秀句

人物特集
没後40年 水原秋桜子の現在
人と作品／秋桜子の表現の現代的な意義／秋桜子のDNA／若手・中堅俳人が選ぶ秋桜子の秀句

第55回 蛇笏賞受賞 第一作…大石悦子

角川俳句賞作家の四季〈夏〉…岩田 奎

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

季音花

をんな坂

大塚茂子

鴇色の春日傘ゆくをんな坂
背を正し哲学の道夏どなり
水音に絡み囀り峡の谷
殿様蛙古刹の池を知り尽くす
春泥を蹴飛ばして行く十四歳

ぶらんこ

井上玲子

声明のわたる古刹や花万朶
花の下今日ある命いつくしむ
詩を追ひ逃水を追ひ八十路かな
カルテット奏づる鳥よ緑の日
ぶらんこを漕ぐよ心に鈴鳴らし

曲屋

近藤徹平

曲屋に嫂ひとり桃の花
舟唄や竿にまつはる花筏
ヴィオロンのむせぶ小夜曲春の星
落武者の先祖の越えし木の芽坂
春日傘スクランブルの交差点

ノスタルジア

正木萬蝶

東京都檜原村の夕蛙
CMの吉永小百合昼蛙
猿島に猿はをらぬよ霾ぐもり
木の芽和へ西に東に五山あり
内灘の逢瀬ひととき桜貝

理無き恋

梅澤佐江

大東京を束の間抱き春の虹
名を変へて流るる川や花林檎
花曇り眠気を誘ふ鳩の声
すんなりと眉の描けぬ日花ぐもり
逃水を追ふは理(わり)無(な)き恋に似て

つくづくと　松井由紀子

つくづくとその他多勢春じょをん
囀や寝覚めの耳のこそばゆき
霊園の桜どこより華やげる
うす紅のもの咲きつくし春深む
堰にゐて蛙いくたび面(つら)に水

春の塵　井口俊晴

北京発国際便や春の塵
多事多端日本の空は花曇
伊豆の旅山葵に噎せし山の宿
おはじきの小箱にしまふ桜貝
桜貝寄せては返す波の音

出でし花　河野はるみ

根本より出でし二輪の朝桜
大漁旗呼子港は桜烏賊
屋号のみ残す看板花ぐもり
「さよなら」を消して去る波桜貝
無くす度また拾ふ恋さくら貝

馬の子　野口和子

句碑の道くまなくこぼれ桜かな
馬二頭飼ひし移住者桜まじ
雉鳴くやソーラーパネルのその下で
馬の子と話したくなり回り道
ひとしきり灰汁抜き談義蕨買ふ

春の星　宮﨑チアキ

光源氏に逢ひさうな径万愚節
ぶらんこを漕いで捨て去る孤独感
開かれし本に瞬く春の星
若人のアイディアの街風光る
文机におでこ支ふる目借時

山笑ふ　飛永鼓

手の中の土やはらかき目借時
田の水の淀んでをりぬ目借時
頬紅はうつすらが良し山笑ふ
山笑ふ生れ育ちも鳥羽の谷
春の夜の漂ふ匂ひ風ゆるし

塩屋の岬　熊倉千重子

座禅堂中を窺ふ蝶一つ
インターホンの音もまあるく春の昼
歌碑遺る塩屋の岬鳥雲に
さあ行かむ声掛け合つて鳥雲に
食細き母のよろこぶ花菜漬

花筏　野平美紗子

満ち潮やゆるりと遡上花筏
満願日花びら踏みて春の暮
水汲み場蜂に脅され退去せり
遅桜我待つごとく散りしきる
春眠や少女の我に会ひにけり

春水　菅原知子

ピアニカの「ソ」は空の色水温む
ていねいに漆器の手入れ水温む
物干しに産着並びて水温む
ぷよぷよの稚の爪切り桜貝
二男坊の爪をかむ癖桜貝

二センチ　福田千春

誰と拾ひしジャムの小瓶の桜貝
桜貝ゆかし海なし県に生れ
同じ話をおだやかに聞く春の昼
暖かや家族写真に稚増えて
しやぶる指は長さ二センチうららけし

桜貝　石田慶子

おすすめの本に添へられ桜貝
へその緒と共に小箱に桜貝
「ぐりとぐら」並ぶ書店や卒園児
桜咲くあなたの好きなあの場所に
風薫るペンキ屋さんのサロペット

竹落葉　田中章嘉

春過ぎて魚跳ね鳥はソプラノで
竹落葉我は齢の禿頭
桐の花香気残して散りにけり
菜園をプランターとしミニトマト
古木槻の幹剥がれ出し夏近し

招き猫　上戸千津子

花人の素通りに鳴く招き猫
入れ替り狭庭に何か春の鳥
春潮のゆつたり寄する須磨ノ浦
一面に濃淡展げ山桜
霞立ち警笛響く九十九折

花吹雪　後藤綾子

轟轟と天地揺るがす雪解川
陽炎を突つ切つて来る路線バス
音楽の館消したる花吹雪
飛花落花あびて疫を払ひたる
麗かや今日のこの空かげり無し

葉桜　中野彊

白椿落ちてしつかり開きけり
糸桜大社の池をめぐり華麗
葉桜となりて川面の静かなり
花水木年々空を高くして
旅支度身軽にせよと庭つつじ

古草　下川光子

古草や農機具並ぶ見本市
古草を踏んで少年逆上がり
菩提寺の井戸には蛇口亀鳴けり
粉薬少しこぼれて春の風邪
せがまれて又読み聞かせ春の風邪

さくら　西浦千枝子

パラグライダー花に煽られ失速す
吉野山コロナ蹴散らす花会式
さくら見え速度をおとす一両車
微笑みて花を見下ろす如来さま
蝌蚪生る休耕田のど真ん中

春の雷　宮崎紫水

登校の鐘の余韻や春の雷
名札には小さくも矜恃植木市
ふらここに立ちて漕ぐ子や座る父
草餅をがぶりと一筆古里へ
森一つこんもり揺らし春の風

石鹸玉　　　　松山清子

姉真似て頬ふくらます石鹸玉
葉桜や新装図書館硝子張り
スイートピー活けて気鬱の少し晴れ
どこまでも菜の花明り土手を行く
水占の吉と出にけり春の旅

☆

☆

季音欄の書き方

○二百字詰原稿用紙使用
○季音（雪・月・花）…欄外右上に朱書
○題名、名前は二行目に
○俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
※新季音に昇欄された方は、七月号から花欄になります。

編集部

俳句四季大賞・新人賞・特別賞結果発表
全国俳句大会最終結果発表

巻頭三句
小檜山繁子
井上弘美
岩淵喜代子
高橋将夫
中尾公彦
柴田南海子

今月の華
木暮陶句郎
土肥あき子

その時、俳句手帳
小杉伸一路

俳句と短歌の10作競詠
津川絵理子
梅内美華子

好評連載
藤枝リュウジ　575の散歩道
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西 朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2021年7月号　6月20日発売　定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明四月号）

大石雄鬼（『陸』編集長）

薄氷や紙の軽さの母となり（一六頁）　菊池ひろこ

「紙の軽さの母」はなんであろう。この比喩におおいに惹かれたが、解釈としては迷う。ひとつは文字どおり紙の軽さになってしまった母。母は誰にとっても重い存在のはずであるが、作者は心を澄まし、母が紙の軽さになってしまったと感じている。ただ軽いのではない。薄く、破れやすい、そして情を排したような紙の軽さである。氷が解けてくる春、作者の心に何が起こっているか。この句の違和感が気になってしようがない。

もうひとつの解釈。それは母が紙になってしまった。そして紙のように軽くなってしまった。母が亡くなられたのであろう。現在、目の前にはいない。目に見えるものとしては紙にある母の名前。母が重い存在であるがゆえに、紙となってしまった軽い母を薄氷を踏みながら、作者はさびしく思い、嘆いている。作者にとって薄氷はこの世の姿であり、作者を取り巻く環境である。薄氷は春の喜びというよりは、薄氷のはかなさ、心細さが作者の心に広がっていく。

共感という点では、後者の解釈となるであろう。でも私が惹かれるのは、前者のイメージである。作者の心の中に広がる物語。いや、私の心の中で広がる物語。重いはずの母、そう思い込んでいた母が、この句をきっかけに、そうではないかもしれないという疑いを私の心にもたらした。

水筒の水がごろんと焼野原（一三頁）　茂木和子

水筒が揺れたとき、中の水がごろんと動いた。人が生きるための水が水筒の中でごろんと転んだ。そして目の前では野焼きした後の野原が広がっている。この「ごろん」は同時に水筒そのものがごろんと転がったように感じる。焼野原は季語としては野焼きを指しているが、焼野原という語には戦後の空襲跡の焼野原というイメージが付きまとう。いや、これは季語としての「焼野原」であり、空襲による町の焼野原ではない、と俳句をする者なら皆言うと思うが、頭に湧き上がるイメージはどうしようもない。

波郷の「霜の墓抱き起されしとき見たり」は自分が抱き起されたとき霜の墓を見たという解釈が通常であるが、最初のイメージは霜の墓が抱き起された景であり、どのように正解の解釈を示されても、頭に浮かぶ「抱き起された霜の墓」は拭い去ることはできない。短さゆえに曖昧さを内在する俳句は、読みのルールがあったとしても、錯覚するイメージも俳句そのものであり、霜の墓の句はこの二つのイメージが同時に頭に浮かぶ。そういう句である。

掲句は錯覚の内容は霜の墓の句とは違う（霜の墓の句は切れ、主語の問題であり、掲句は季語の問題である）が、戦後の焼野原にごろんと転がった水筒を思わずにはいられない。作者の意図はともかくとして。

俳誌望見

梅澤佐江

『沖』令和三年三月号　通巻六〇六号
主宰　能村研三　発行所　千葉県市川市

昭和四五年、能村登四郎が市川で創刊。師系水原秋桜子能村登四郎。「登四郎の美学を継承しルネッサンス『沖』をめざす」を理念とする。（月刊）

主宰詠「寒中の芽」一〇句より

　初刷は単襲の折り目かな

元旦に届く新聞のずしりと持ち重りのする分厚さはいかにも年の始めという感じがする。別けても元日の新聞のインクの香りは新鮮で新年の改まった気持となる。（単襲の折り目かな）の措辞の、公家の男女の装束の絹の単衣を何枚も重ねたような新聞の折り目だなあとの比喩に荘厳な気の満ちる感がある。

　松籟を身ぬちに鎮め弓始

松の梢に吹く風の音色は些かの濁りも混じらず静謐さに包まれる。そのような澄んだ心持ちで煩悩すら吹き流す感覚を保ち、静かに落ち着いて新年初めての弓を引く作者である。

　寒中の芽にして朴は天を指す

朴は冬になると全ての葉を落とすが、落ちた後は既に冬芽を備えている。花も葉も大きいので冬芽のサイズも特大、枝の先端に上向きに大きな芽をつけた様は存在感があり、まるで発射を待機しているロケットのように見える。この句の眼目は、寒中の芽にあって（天を指す）である。個の生き様に準えており、延いては結社の真髄に触れた気がする。

蒼茫集　五五名　各六句より　五名

　球体は野生のかたち星凍つる　辻美奈子
　うそほんとポインセチアの真つ赤なり　田所節子
　三寒四温てふ人の世に似たるもの　千田百里
　つくばならひぐいと帆舟の向き変はる　吉田政江
　人いつか一壺となりて春の星　荒井千佐代

潮鳴集　一四〇名　各五句より　五名

　晴れて白曇りて真白冬かもめ　井原美鳥
　雪霏々とじやわらじやわらの津軽三味　くどうひろこ
　家中が着ぶくれてをり家族なり　菊川俊朗
　凍星を追ふ旅であり山頭火　平松うさぎ
　十二月来たり駅前ポスト赤　佐藤克江

沖作品　主宰選　一六〇名　各五句より　三名

　冬干潟生命体は皆必死　牛島晃江
　果てぬ間のほむら紫牡丹焚　里村梨郎
　仏飯もさみどり色の七日粥　五十畑悦雄

登四郎氏の俳句の美学を継承しつつ「ルネッサンス沖」を標榜され、沖の方々の感性豊かで個性的なお句の数々に清新の気の漲る心地好い風を感じさせて頂いた。

ＺＯＯＭを使い、「自宅から参加できる『沖オンライン句会』の参加者募集」の記事に目が釘づけとなる。結社の行事を中止せざるを得ないコロナ禍にあり、自宅に居ながらリアルに参加し双方向の臨場感を共有出来るのも一考と思える。

現代俳句鑑賞

網野月を

射逸れたる矢の行方こそ春惜め　高橋睦郎
（『俳句四季』4月号・巻頭句より）

「射逸れたる矢」への愛情の意である。的を射た矢に比して「逸れたる矢」に作者の、つまり射手の心を投影しているのである。係り結びの技法が有効である。

年輪に傷限りなし日脚伸ぶ　本多燐
（『俳句四季』4月号・夏冬図より）

切り株を想像した。伐り倒した大木の切り株は多少年を経ているように感じる。座五の季語「日脚伸ぶ」の季節になって、雪が解けて、直接に日差しを受けてはっきりと見えるその切り口には傷が数多認められたのである。作者の容赦のない客観の眼が其処にある。

口々に春ですねぇと橋のたもと　池田澄子
（『俳句界』4月号・愛より）

川に架かる橋なのか、歩道橋なのか、はたまた駅ビルの自由通路なのか。昇るところなのか、降りて相手に出会ったのか、分明ではないのだ。交わした会話と空間の呈示のみで俳句は成立させることが出来るのである。将に立体俳句論のような捌きである。他に「葉桜の隙間隙間や光は愛」がある。

柳の芽鳥は隠れてゐるつもり　白石喜久子
（『俳句界』4月号・おとうとより）

上五の季語「柳の芽」はまだ新芽で枝の方が目立つほどに小さいものである。その葉陰に「隠れてゐるつもり」の鳥たちがいるのである。鳥たちに訊いたのではないだろうけれども、少なくとも作者の目にはそう見えたのである。他に「何もかも忘るる如く春の雲」がある。

うすらひの下にお化けのやうな泡　太田うさぎ
（『俳壇』4月号・お化けより）

表題の「お化け」になった由縁の句である。いつも意表を突かれる作者ではある。詩心は勿論だが、構成力が揺るぎなくて、意表突く表現を読者にストレスなく読ませる技術も申し分もない。

耳に挿すつもりはなくも土筆摘む　山田耕司
（『俳壇』4月号・つもりはなくもより）

掬め手から人の心を摑み取る作者なのである。一見へそ曲がりの句であり、穿っているのだが、しっかりと心を摑まれてしまっているのだから、言い訳の余地はない。これだけの独創性と捻りが羨ましい。

凄まじき廃船蝶の貫ける　　寺島ただし

（『俳句』4月号・時を待つより）

浜に座礁している廃船を想像した。それほど大きくもない木造船である。漁船の成れの果てであろう。朽ちきって、舷側の横に張った板木には穴が開いているのだ。そしてその穴を蝶が抜け出てくる。シュールレアリスムそのものだ。しかしながら実景であろう。俳句は、人知の想像力よりもその場に出会った事実の方が奇なり、なのである。他に「投錨の船の音なし春の月」がある。

春はあけぼの空腹に目覚めたる　　黒澤麻生子

（『俳句』4月号・雲雀野より）

「春はあけぼの」は名句である。敢えてこの出だしにチャレンジしたということであろう。そして「空腹に」と続く辺りは手練れである。連句十二句の冒頭の句であるからキャッチのいい印象になっているということである。そして十一句目に「春愁や青墨を濃く磨り上げて」がある。上五の切れ字「……や」を座五の「……て」で受けていて、よく言う原則からは外れる作法である。「青墨」は法事などにも用いるのだが、この場合は書道の好みによって「青墨」を使用していると解した。「青墨」は滲みの優れた墨であるが、「濃く磨り上げ」ることで滲みを回避していて、「春愁」の本情を受ける形をとっている。

後姿のかたむくやうに草萌ゆる　　大石雄鬼

（句誌『陸』4月号・後姿より）

表題の句である。風に靡く草であろうか、もしくはまだ生えそろわない柔い草草の頼りなげな姿を形容しているのであろうか。「後姿」という措辞は、何とも果敢無げな言い回しではないだろうか。作者のメモリーを具体的に推し量ることは出来ないのだが、「後姿」には生涯のメモリーが重複しているように思われてならない。他に「ハンガーからハンガー下がり穀雨かな」がある。

水鳥とゐて人悼む日なりけり　　中西夕紀

（句誌『都市』4月号・春の鳶より）

前書きに「北川美美さんの死去を聞く二句」とある。この句は去る二月に登戸駅から徒歩で多摩川河川敷へ吟行した折の作である。今年の一月十四日に亡くなった句友の、北川美美さんへの追悼句である。俳句は手を合わせるに等しいことでもあるのである。もう一句「水鳥の声の哀切どれとなく」がある。

山本鬼之介　選

水明忌

去る四月三十日に予定されていた第三回水明忌は新型コロナの蔓延により、会場に集まっての句会は中止となりました。しかし、水明忌に申込みをした会員が投句をして、忌を修しました。

主宰詠

夏近しちと出来すぎの肖像画　山本鬼之介

蛙子むかへ琺瑯引の洗面器　〃

三　極(天地人)

夏近し虚子の短冊草田男へ　網野月を

マヌカンの深きスリット夏隣　五明　昇

青海波の大皿並び夏近し　野田静香

超特選

小悪魔の甘へ上手や夏近し　新　暦文

善人の振りして突く蝌蚪の紐　大村節代

殿様の系譜を継ぐや蛙の子　青木鶴城

五湖抱く若狭路今や夏隣　高島寛治

絹天の光る足袋蔵夏どなり　大塚茂子

夏近し池の端で吹くサキソフォン　境　延昭

店頭に終り初物夏どなり　星野和葉

特選

忘れ潮にきらめく魚影夏隣　丸山マスミ

蝌蚪の群次々できる点描画　反町　修

マネキンは謎の微笑よ夏隣　近藤徹平

天を突く大樹の力夏近し　宮崎チアキ

山の子の声透きとほる夏隣　大場順子

すれ違ふ縞の着流し夏隣　石井喜恵

日に揉まれ水にもまれて蝌蚪育つ　茂木和子

お玉杓子に格ある泳ぎ神の池　星野和葉

普通選

足が出てちりぢりとなり蝌蚪の群　網野月を

道草の顔ひとつあり蝌蚪の池　新　暦文

密なるやお玉杓子の尾の震へ　井口俊晴

夏近し少女の胸のシルエット　大村節代

夏近し雲のだんだん太くなる　青木鶴城

被災地を走る聖火や夏近し　日高道を

艪の音のきしむ渡し場蝌蚪の水　丸山マスミ

窓をさす朝日に目覚め夏近し　反町　修

蝌蚪の紐遺伝子連なるかたちして　高島寛治

飛び出せば光の世界蝌蚪生るる　越田栄子

蝌蚪泳ぐなかなか暮れぬまろき池　大塚茂子

板の間に身横たふ日の夏どなり　神田治江

青空に大木そよぎ夏近し　鈴木和子

梵鐘のひびく休田蝌蚪溜　近藤徹平

蝌蚪の紐水の匂ひの重さかな　石山かつ子

俳人の仮寓せし村蝌蚪あそぶ　曲淵徹雄

ハイカーの興味しんしん蝌蚪の群　宮﨑チアキ
洗濯屋に冬物多く夏近し　田中章嘉
濁世にも絆は強し蝌蚪の紐　五明　昇
忌を修す窓開け放つ夏隣　柚木治子
黒々と犇く蝌蚪の四分音符　大場順子
蝌蚪の紐べこは二年で売られゆく　境　延昭
弟としやがんで覗く蝌蚪の池　石井喜恵
卒塔婆の梵字のごとし蝌蚪の群れ　染谷正信
前撮りの花嫁御寮夏近し　本橋稀香
父と子の揃ひのマスク蝌蚪の紐　小倉倭子
蛙の子甕に放され我が家族　野田静香
舌を出すトーテムポール蝌蚪の水　内田恵子
雨もよひ蝌蚪に針孔ほどの口　松井由紀子
大いなる日の暈おたまじやくし生る　茂木和子
洗剤の香りほんのり夏どなり　河野はるみ

講評　山本鬼之介

夏近し虚子の短冊草田男へ　網野月を

作者の自邸の書斎に掛けてある短冊を題材にした俳句であると推察した。おそらく、几帳面に季節の移り変わりに合わせて短冊を入れ替えているのだと思う。句の内容までは分からぬが、爽やかな初夏を待つ作者の気持が溢れている。

マヌカンの深きスリット夏隣　五明　昇

大都会の目抜き通りにあるデパートの大きなショーウインドウが目に映る。マネキン人形が身につけている夏服には、チャイナドレスを思わせるような長い切り込みが入っていて、道行く女性が憧れの眼差しで見て行くし、男も興味本位の眼を向ける。街はすでに初夏の装いである。

青海波の大皿並び夏近し　野田静香

老舗大料亭の板場が見えてくる。板長を筆頭に、十名くらいの板前が忙しそうに立ち働いている。今夜の大宴会に備えて、これから海の幸が盛り込まれようとしている。青海波の模様が、清々しい初夏への誘いと躍動感を伝えている。

小悪魔の甘え上手や夏近し　新　暦文

かつて銀幕で活躍した女優「加賀まりこ」を彷彿させる俳句である。駆出しのホステスが、いわゆる「パパ」に甘ったるい声で最新ファッションの夏服をねだっている様子である。

善人の振りして突く蝌蚪の紐　大村節代

グロテスクな格好の蝌蚪の紐に好感を持つ人は先ず居ないと思うが、希に例外もあるかも知れない。淑女然とした女性が、人の見ていないのを見定めて、蝌蚪の紐を棒で突きまわしている姿を想像すると、実に滑稽である。

殿様の系譜を継ぐや蛙の子　青木鶴城

両生類アマガエル科の蛙の一種である「トノサマガエル」のお玉杓子である。「殿様の系譜」と、なかなか洒脱に表現したのが佳い。天敵に襲われた時、腹に空気を貯めて偉そうにふんぞり返る姿が殿様に似ているからとの説もある。

五湖抱く若狭路今や夏隣　高島寛治

若狭の三方五湖は、多くの人が訪れる観光ルートの一つで、四季を通じてそれぞれ特色がある。湖面を渡る晩春のそよ風を身に受けて遊歩道を歩く気分は最高。

絹天の光る足袋蔵夏どなり　大塚茂子

「絹天」は、絹ビロードの一種で、別珍よりも高級な生地。この絹天で作られた足袋が収められている蔵の周りの景観を思うと、夏隣の季節感を実感できそうである。

夏近し池の端で吹くサキソフォン　境　延昭

柔らかで甘美な音色を出すサックスで、モダンジャズに陶酔している男を想像する。池を取り巻く木々には若葉が美しく茂り、池を渡る風が心地よい。最高の時が流れる。

店頭に終り初物夏どなり　星野和葉

本句によって「終り初物」という言葉を初めて学習した。初物よりも味が濃く美味なのだろう。この青果物から、季節の移ろいを敏感に感じている。

蝌蚪の群次々できる点描画　反町　修

「山下清」画伯の絵を鑑賞している気分になる。発見の妙。

マネキンは謎の微笑よ夏隣　近藤徹平

モナリザ同様、生なき者の微笑は恐い。夏隣との違和感。

山の子の声透きとほる夏隣　大場順子

元気な子供の声が山に谺する実に爽快な季節である。

すれ違ふ縞の着流し夏隣　石井喜恵

縞柄の和服を着た粋な男性。すれ違った後思わず振り返る。

山本鬼之介　選

水明集

高崎　原田秀子

蛤の幽かな吐息夜の静寂
駆引きも一興なりや植木市
てんでんに息吹あふるる木の芽かな
睦まじく老いて春眠憚らず
苗木売る鯔背男の金ピアス

さいたま　曲淵徹雄

春の雨オープンカーを駆る親爺
残る鴨光ひきつれ潜りけり
春の雪湯風呂に撫づる膝がしら
鳴く亀を彫らせてみたし甚五郎
陽炎に憑かれ遠のく赤い靴

上尾　横山君夫

陽炎の立ちてSL日和かな
陽炎や真つ赤なポルシェ浮いて去る
亀鳴くや遅刻の詫びに嘘すこし
国後へ徒歩で行けさう流氷原
しろがねの光となりて目刺反る

さいたま　加藤でん治

引鶴や雲居へ斯くも厳かに
亀鳴くや空気動かぬ妻の留守
遠離るほどに明るき花辛夷
野遊びや摘むをためらふ男の手
払暁や湖上にひかる蜆舟

さいたま　染谷正信

亀鳴くや意外と長き頭脳線
時代劇ひねもす見るや春炬燵
掛茶屋に電車の絵本山笑ふ
ほんたうの空を見つけむ揚雲雀
花辛夷秩父往還歩かばや

反町　修

踏青や心晴れたる浮遊感
地殻まで突き刺すごとく落雲雀
朝霞ゴルフコースの遠き声
川下り棹つく岩に花菫
天守閣湖北の宿の蜆汁

さいたま　保坂翔太

根性と我慢のはざま寒稽古
弟に九九教へをり草萌ゆる
蕗の薹車中に満つる秩父の香
料峭や青果市場の羅滾る
武闘派の鴉の喧嘩春疾風

渋谷きいち

思ひ出は暗渠にかくれ水温む
水ぬるむ「春の小川」は暗渠ゆく
雛あられ乗する手の平「福つかみ」
紫雲英田や小学唱歌聞こゆるよ
汐の香をポッケの底に磯遊

新　暦文

紫雲英摘み畦の仏に首飾り
へら竿に当りの予感水温む
ふくよかな津和野の鯉に雛あられ
げんげ田や大の字で見る空の青
磯遊び白き眩しき膝小僧

熊谷　越田栄子

風に揺るる若木の梅に花一輪
苗木市生り物の木を記念樹に
浜で焼く大蛤の呵呵大笑
足下に大地の温み風光る
親が子に託する心木の芽吹く

さいたま　塩野久子

雲映る釣りの穴場よ水温む
雛あられ朝の光の中に映ゆ
二つ三つ蕎麦屋の土間に雛あられ
げんげんやむかし輪にして首飾り
父と子が寝転び空をげんげ畑

東京　鈴木和子

麒麟なら見ゆる巨木の木の芽かな
ニコライの円蓋青し春の雨
天と地を結ぶ春なり星煌煌
七輪のゆたかな香焼蛤ぞ
芸大にチェロの音流る木の芽風

平塚　丸屋詠子

校長の涙目胸に卒業す
八丁堤飾りたてたる花辛夷
風神に雷神召され春嵐
うららかや白磁の白の限りなし
青銅の剣畏む春の蝿

さいたま　村杉清吉

踏青や大地の香り纏りぬ
紅梅や手の平の舞ふ太極拳
揚雲雀精魂こめて独唱す
踏青や「エーデルワイス」懐かしき
紅梅や天平の里膨よかに

決壊の爪痕いやす花林檎
春愁やいま鎮魂の平家琵琶
夕雲雀一直線に浄土まで
それぞれの人に十年菫咲く
辛夷咲く老人だけになりし村

さいたま　日高道を

風渡る紫雲英の果てのちぎれ雲
橋の名を尋ねて親し水温む
春雨や烟る港を人力車
カステラの底の甘さよ春の雨
山葵田の水車の軋む音長し

川口　野田静香

ひととせの早きを思ふ桜かな
優しさの裏の秘めごと春の雨
渓流を跳ぬる毛針や山笑ふ
種藷や校庭畑でありしこと
つちふるや吾が傾城の寝姿を

さいたま　青木鶴城

永き日や海を渡つてゆくピアノ
真つ先に白き花へと初蝶来
内裏雛向ひ合せに納めけり
不安より希望勝りて卒業す
いくたびも起立着席卒業式

東京　石川理恵

旋回は感謝のしるし鳥帰る
聞き流す夫の小言や春の雷
青饅作る母の味には程遠し
初桜嬰児の歯が生え初むる
春の宵外湯巡りの下駄の音

さいたま　笹本啓子

芽吹く樹々時に光りを播きちらす
呼びこみの値下げ楽しむ植木市
焼蛤や夫の真顔の久しぶり
花菜黄に燃えて我等の心抱く
花の雨おどけ羅漢が歩き出す

熊谷　神田治江

初蝶と目が合つたかに思はれて
野良猫ののびの背中や水温む
春の服オーガンジーの透け加減
外囲ひ外し春陽を奥の院
泣き虫や卒園の日のすまし顔

さいたま　梅澤輝翠

鶴帰る今や父母ねむる地を
藪からぼうこんな近くに囀が
別人に見紛ふ友の春の服
姿見の中新調の春の服
乳呑児の手足によきによき花辛夷

西幅公子

北窓開き青春の本掘り出せり
家軋み降りくる書籍春の地震
宅配の食事のチラシ二月尽
春浅し見学の人面接中
春の服平熱三十六度四分

さいたま　和田仁八郎

整体院へ行くにむかしの春コート
紅梅を一枝生けて家籠り
苗箱の河原撫子地に移す
ほめらるる庭片隅の山椿
下萌の道口遊む「早春賦」

杉戸　佐々木史女

内紛の埋もるる古墳雲雀鳴く
青き踏む下校のチャイムのびらかに
青年や平家琵琶弾き春の夢
鳥帰る旅券の期限切れしまま
古書店のシャッターぬらす花の雨

さいたま　橋本京子

桜貝辺にも沖にも家居なし
臍の緒の桐の小箱に桜貝
春雨や辻の地蔵の薄化粧
春月夜恋歌ひとつ生まれたり
旅疲れ野風呂を冷ます春の雨

川口　新井のり子

幼子は串田楽を持てあまし
手術終へ見上ぐる空に鳥帰る
百年に近づく大樹鳥帰る
渡し舟笑顔の多き春の川
合格に馳けて徽章を買ひに行く

さいたま　川村　浩

寒戻る腰にいつもの万歩計
手を繋ぎ入りたくなる枝垂れ梅
蒼天の山茱萸の花点描に
酒蔵の門灯となる花山茱萸
声変りの少年棒立ち鳥雲に

斎藤みよ

明日ありと一草一木物芽張る
待つ人にしるしばかりの桜餅
桜餅棺の中の母さんへ
春眠や「記憶にない」と言ふ言語
炊立ての炊込み御飯春彼岸

若狭　山﨑郁子

山間のせせらぎ耳に青き踏む
踏青や素足に沁むる川の水
平原に春の嵐を迎へ撃つ
啓蟄や夕陽が沈む大平原
直下せしあれは雲雀か隕石か

さいたま　千坂平通

吉川　杉浦理恵

点点(ちよぼちよぼ)と芽吹きいつしか春野原
はるばると黄砂来たりて吾が肺に
美をおごる花も頭(づ)を垂れ春の雪
木の芽雨双葉は拍手せしやうに
吹くやうに出でし木の芽を擽る風

さいたま　本橋稀香

へばりつく蒲公英畦の釦かな
熱き茶を啜る棟梁春浅し
鶯や家籠りの吾呼びに来よ
鶯や字の名知らぬ人ばかり
抱卵の鳩見つめゐる春の闇

新井孝麿

早春の谷中散歩の町中華
鬼に臍盗らるる気分春の風邪
書き初めの文字は「初恋」古希の爺
恋文を書けば色増すヒヤシンス
春の風邪白き手口にいい女

栃木　佐々木典子

美しく老いむと肩に春ショール
陽炎といつしよにゆるる幼児よ
春眠へ紙の軽さで落ちてゆく
陽炎の中に押しゆく車椅子
世の中を変へるときかや春の雷

伊予　向井章子

風呂時に闇を揺るがす猫の恋
首のままぽとり椿の不仕合せ
更紗木瓜工程表の夢と消え
春の夢静かに燃ゆる旅日記
紅梅の海に向き合ふ空広し

春日部　仲田利子

亀鳴くや闇夜の先にほの明り
飛鳥路の亀石の亀鳴くやいつ
父祖の地へ越ゆる峠路かぎろへる
春の海静かに雨のレクイエム
目刺焼く匂ひも肴夜の膳

越谷　阿部幸代

東風吹くや群馬走りし地の古墳
強東風を宥めて座せり飛鳥大仏
畑にも花の色出で春の虹
「今が旬」その一声に鰆買ふ
学び舎の時を刻みし大辛夷

春日部　諏訪サヨ子

かぎろひのゆるき坂道異人館
かげろふや子等巣立ちゆく鄙の駅
亀鳴くを確と聴きけり猫と我
蕗の薹日光連山嶺白し
キャンパスの凛凛しき袴風光る

雀来て無縁仏も彼岸かな
蔵のカフェ裏の畔道土筆萌ゆ
お水取童子の足音闇を裂く
松明の駆け上ぐる音二月堂
白梅の散らふ池面の光かな

草加　外村紀子

義士祭忠義の御魂甦へる
中庸の心の程や春の月
春の雲休園中の観覧車
枝伐られ武骨街路の老桜
欄干に凭れ飽くなき花筏

東京　太田絹映

剪定や講釈を聞く昼下がり
春泥や鍬を洗うて日の暮るる
雨水来てぬるむ瓦の蒼さかな
蛇口よりアルトの音色水温む
若狭より奈良の都へ送る春

若狭　檜鼻ことは

しなやかに風を孕むや春コート
街角は今満開の春の服
初桜一輪からの生き様を
囀や紅茶揺らしてブランチを
春服に泣き笑ひの顔よく似合ふ

さいたま　菅原真理

こぶし咲く生れし稚の手ひらくやに
拍手の陰で亀鳴く弁才天
亀鳴くも鳴くに鳴かれぬまつりごと
かげろふの中駱駝にゆられ知らぬ道
もう一杯妻汲む朝の新茶かな

さいたま　安倍弘夫

クローバの思ひ出辿る野原かな
連翹やクレーン車延びし青き空
出迎へやひとかたまりの黄水仙
スランプを脱けしひととき揚雲雀
降り注ぐ緩き雨音目借時

若狭　岡本祥子

木の芽和靄薄れゆく隠れ宿
幕開けの柝の音にしやんと春の宵
片栗の花プリンシパルの飛翔
恋しけれど適度な距離を春の風邪
いづくより聞こえむ雛の琴の音よ

川崎　鈴木玲子

顔がこはばる新社会人春の服
塀いつぱいに絵を描く卒園園児たち
コロナ騒ぎで気付かぬうちに鳥帰る
素つぴんで着こなすジョーゼットの春服
記念樹と共々伸びて卒業す

さいたま　小川洋子

さいたま　竹澤和子

ためつすがめつデートに選ぶ春の服
ルージュ引き微笑み湛へ春の服
マネキンに魅せられ手にす春の服
荒川の夕映えに消え鳥帰る
大空の専用道路鳥帰る

篠﨑紀子

思ひ出が想ひ出呼ぶや雛あられ
水温む小川に音符はねてをり
一滴の水の重みや水温む
磯遊び夢の欠片を児と追ひつ
ひだまりの畦に紫雲英の色まさり

飯田忠男

望郷の十年長し春の虹
羽田発ジェット突つ込む春の虹
霾晦コロナ禍の今日馴染が来
江戸川の川面紊れて雲雀東風
東風を背に江戸川上り関宿城

髙橋敏子

安寧の世にふさはしき草の餅
没の句を拾ひ直して草の餅
難しい事はのちほど蓬餅
屋敷神に一つ届くる草の餅
巡り来て仰ぐ桜や只うれし

さいたま　霜多光代

児を背負ひ鳥と戯る梅日和
天神の梅が香背なに女坂
酔客の二歩目に絡む春北風
春の風邪夫の土産の生姜糖
踏まれゆく古草勁し萌え出づる

森下美智枝

宇宙船からメール届くや花辛夷
良き友に会へし学び舎卒業す
窓の外気づき叫ぶや春の虹
宇宙船見ゆる夕空鳥帰る
武家屋敷裏の梢で囀れり

野村美子

瀬戸内の島の向かうに春の虹
今半の暖簾が誘ふ春の宵
秀吉の夢の城址や初桜
浅草を散歩の犬も春の服
夕暮れの沼の細波鳥帰る

川口　山岸久美子

畑向かうけぶる春雨森いだき
わが胸にそぼ降る雨や春の宵
さざ波のそつと寄せくる桜貝
かの時のおもひでさそふ桜貝
ぬくもりをのこして止みぬ春の雨

女雛の目我に何やら語りさう
古雛や雪洞の布破れをり
雛も老いそうつと寺へ納めけり
我雛は嫁入すなり供養塔
折紙の雛の華やぎ独りかな

さいたま　池田珪子

諸子釣る揺るる穂先に竹生島
初蝶や出合ひ頭の切り口上
畦道に強き踏み跡春田かな
花大根縁むらさきの風車かな
散人も未練がましく春愁ふ

伊奈　菅原卓郎

縁もらひ若狭の花鳥子の寝息
花鳥やエピソード一杯茶友達
気まぐれな海よ漁翁の蒸し鰈
山菜の香厨に満つ春なかば
春塵に煙る野良牛インドの地

小浜　松島寛久

春雷や父の命日近づきぬ
春雷に犬も駆け込む土間の隅
コロナ禍やそれでも桜芽吹きをり
友よりの『アマビエ』届く桜東風
シャボン玉人包み込む裏技も

さいたま　山戸美子

春うらら赤ちゃんパンダ一歩ふむ
うぐひすの谷渡り聴く鎮守の杜
百歳を祝ふ雛壇風格あり
幼の幸願ひ雛の舟の旅
魚河岸に太き声飛ぶ初鰹

和歌山　嶋田洋子

初初し乙女のゑくぼ山笑ふ
眼裏に「夢二」の女人山笑ふ
アンニュイと呟いてみる花曇
花の辺の立止まり見る夢路かな
春うらら民踊の会初デビュー

さいたま　清水桂子

水温むシベリアの地は凍土解け
水温む山の幸ならぶ朝の市
鳥の巣や鳥の集団旋回す
園庭の片隅に生ふつくしんぼ
芥菜を土手で摘みとる昼下がり

木村るみ子

春の闇山の中にぞ生まれけれ
人混みやマスクの中に息潜め
辛口の酒を一献義士祭
五色の幕風を孕みて義士祭
義士祭無念晴らせぬ人のゐて

東京　山中いちい

下萌や黒土こぼるるスニーカー
雉なくやおくやみ欄に恩師の名
厄除けの火祭り春の時雨かな
水温む川鵜の一部始終見る
パルスオキシメーター購入二月尽

鬼石　榊原聰子

若草や御役御免の三輪車
処方薬漢方にして春の風邪
春分や体内時計あると云ふ
春寒し人身事故とて長停車
朝めしは山への車中春めける

いすみ　平石睦子

春一番ビルの谷間を吹き抜くる
受診待つ心和らぐ梅一輪
春寒や重ねし本がまた崩れ
梅日和散歩の途中遠会釈
木蓮の蕾の先に青き空

さいたま　水野興二

上流へ流るる大川水温む
落ちし虫踠いて岸へ水温む
小銭光る神社の小池水温む
水温む川へ突つこむ轍あり
地下鉄を出れば地上は花ざかり

町田　瀬戸雄二郎

難しきリモート面会春遅々と
うららかや空を二分の飛行機雲
追ひ追はれ谷田せましと恋鴉
川すぢを白き鳥二羽冴返る
新旧の雛に囲まれ老の園

横浜　山岸弘子

鳥の巣や森の息吹に守られて
水温む籠る心を開きたり
この年に出会ふ古木の糸桜
交通渋滞招く彼岸の入りの日よ
庭先の残花を惜しむ声聞こゆ

さいたま　岡田宣子

水温むほいさほいさと泳ぐ亀
黄の花は竹の花入れ利久の忌
難題をまとめて座長春の海
石庭の水輪に浮かぶ桜かな
鐘の音に桜ひとひらボンネット

綿貫ひさの

空仰ぎ蕾かかげし辛夷かな
再会し手振る遠目に花こぶし
卒業式終始涙の若先生
天井を視つめ直立卒業子
黄の蕊をかすかに残し落椿

東京　柳父はる

和歌山　葛城千世子

三角の陣形すいと春の鴨
段ボール遊びの子等や風光る
ライン会議画面をＯＮに風光る
歌声の響く校舎や風光る
水盤に絵の具一滴霞草

横浜　川島典虎

デパートの実演販売春キャベツ
胃の検査夕べ若布を食べました
おしやべりに指で教ふる春の虹
表彰を親も見られぬ卒業式
いつ尽きるコロナの話題春深し

藤沢　小島喜代子

新しき補聴器春の音つかむ
新居への引越出来たと春の声
「お先に」と天寿の旅立ち白椿
残されて天命を待つ雪椿
花冷えや背中まるめて猫となる朝

蕨　細井良子

目の前を不意に初蝶過ぎにけり
記念樹の老梅健気に花五つ
白木蓮夜は公園のシャンデリア
彼岸寺挨拶交はす顔馴染
東風吹きて吾子の歩みを乱しけり

さいたま　小林京子

灰汁取れば底でふるへる蜆あり
友ありて臓腑にしむる蜆汁
空白く輪郭薄き花辛夷
素うどんを門前で食ふ彼岸かな
各々がおのおの開く辛夷かな

川口　遠西勢津子

特急通過黙して立てり春の雨
でこぼこの土沈めけり春の雨
春雨や夜半の家を包みけり
遠き日や波打ち際の桜貝
美しき月の渚の桜貝

田村福美

春雨や訪ね来し道迷ひ道
春雨や散歩の犬の雨コート
春雨にふと誘はれて花の下
春雨や野花を愛づる地蔵尊
春雨や行方不明の第二ボタン

和歌山　南条きわゐ

「おはよう」と呼べば飛び立つ春の鳥
全力で棕櫚の皮はぐ春の午後
折れてまで勢ひありし山椒の芽
野蒜摘み夕餉の一品飾りけり
踏青や前進のみと奮ひ立つ

東京　飯室夏江

手招きで夫呼ぶ旅の植木市
蛤つゆを嫁に教はる山育ち
朝市の蛤売る声三世代
欲するもマンション住まひ植木市
椀二つ蛤二つの珊瑚婚

さいたま　森　和子

コンサートの余韻りんりん春の星
明日発表窓から仰ぐ春の星
手相見に右手を預け春の星
一本の前歯ぐらぐら入学す
畏り拍手の中を入学す

東京　畑宮栄子

紅一面堰でとどまる落椿
なじみのギャラリー閉ぢミモザゆつさゆつさ
ひとがたの木の芽のありて子も産まる
辛夷咲く大きな野望胸に秘め
旧家跡更地になりて菫咲く

河原叔子

ふと幸をやはき春光猫戯れ来
稜線の残雪処処に焦げてをり
何時の間に夕影延びて春分よ
西空に笹舟のやう春の月
つつましく飛石の間の草萌よ

鬼石　加藤ナヲ子

雨粒のころりと落つる芽木の朝
祖母の忌や満開となる君子蘭
かたくりの花は北向き斜面かな
亡き母の植ゑし紅梅満開に
楤の芽の小さき命青々と

東京　水落守伊

最初はグー今チョキくらゐ花辛夷
実習園キャベツ植ゑ付け卒業す
萌やしめく朽葉の下の物芽かな
ものの芽のいくつか農の敵として
春の雷忘れて居れば又一閃

さいたま　福田育子

妖精にみちびかるるやいぬふぐり
いぬふぐりパパに差し出し得意顔
雛あられひとつつまみぬお姫様
糸遊や母のおもかげ影ろへり
風光る太平洋を下に見る

元田亮一

春の影墨痕太く社かな
泡のごと遮断器の鳴る春の暮
柏手の二拍そろひて社日かな
書棚には母の歳時記春を詠む
亀鳴くやかなはぬ思ひさておいて

去り難し「思いのまま」の梅三分
立ち雛けふも自分の脚で立ち
囀の高みより降る終の家
いつぱしに風読む眼しやぼん玉
独り居の週末久しあたたかし

大　阪　遠藤人美

残る鴨一羽となりぬ沼広し
残る鴨淋しくも見え自由にも
まどろみの中かじつとして春の鴨
秘密などないと言ふ夫春寒し
春寒をパンプスの音高らかに

さいたま　高原和子

春雷やカフェでいつとき雨やどり
春の雷ぎらり目をむく仁王像
耳塞ぎ部屋で固まる春の雷
一目惚れ熱く車中の春の朝
菜の花や若きカップル清々し

武田重子

検温の春のナースの防護服
すべきこと何も無き日の春の雷
垂れ桜ゆさゆさ右にまた左
ゆるり行く桜トンネル仰ぎつつ

湯浅　和

蛤の合図で旨みほどけけり
苗木市初心者の目はきらきらと
蛤や植木の鉢に殻広げ
青空につんと背伸びし苗木市

さいたま　緒方みき子

紅白梅龍太兜太の交友録
天向きて精一杯に囀れる
半世紀住みし団地の花辛夷
大輪の椿重たく枝に垂る

宮　代　関谷多美子

春ショール子犬に留守居諭す妻
ママ友のお洒落談義や春ショール
黒猫のびつくり眼春の雷
入学を告げたき君はひとの妻

さいたま　鈴木藻好

雛流し二隻をつなぐ赤き紐
春の海あの日あの時の修羅場かな
陽炎や変異ウイルス暴れだす
脳天までひびく尻餅下萌ゆる

和歌山　髙橋満耶子

山笑ふ縄飛びの子の腕まくり
背を伸ばし朝の体操山笑ふ
老母との墓の掃除や山笑ふ
種芋や豊作待つは両手鍋

さいたま　橋爪さなえ

草加　持永喜夫

種芋の無駄なる皺を数ふる夜
種芋や唐(から)長安の門を経て
七十八十(ななそやそ)百も半ばと山笑ふ
打波は密めき隠す春の夜

さいたま　秋谷信一

鳶の声潮に引かれて春の磯
芽吹き待つ春田に潜む遊行柳
菜の花や浮かれて走る利根堤
鮊子の釘煮の匂ひ瀬戸の凪

田中泰子

吊橋の影もゆらゆら山笑ふ
乳母車の園児すし詰めクロッカス
春めくや厚き耳朶母ゆづり
梅開く進路決まりし子の電話

森美枝子

春めくや水子地蔵に「ヤクルト」が
春めくや鞄に入れる「静かな木」
蕗の薹壊れしままの水車小屋
ソプラノの胸ふくよかよ山笑ふ

小駒さち子

鳥の巣や生きてゐるまま幾度も
鳥の巣や五つ子二度も育める
水温む鯉がふはりと浮かびをり
リラの径足音軽くなりにけり

さいたま　横山礼子

行間に浮かぶ呟き水温む
校庭の声のあざやか水温む
水温む仕舞ひの菜漬染付けに
三・一一双葉の森に古巣あり

北出久美子

春服を着せてあげたし道祖神
猫の餌をついばむ野鳥風光る
明日退院見下ろす樹々に風光る
春服を見送る父のVサイン

樋口元美

鳥の巣や運び集めし赤い紐
温む水指輪はづしてバシャバシャと
探し物ばかりしてゐる春愁
とりあへず歩幅広げて春の服

奥山粉雪

日脚伸ぶ並ぶ蕾のひとつづつ
ほろほろとほろほろほろと咲く白梅よ
春めくや出かけ支度にピンクさし
末黒野の新芽の色の鮮やかさ

小川　藤間友二

旋風塀の隙間に春を入れ
卒業し初志貫徹と出刃握る
国会も多勢に無勢芋嵐
座布団の数より立て込む花の茶屋

空乾き風鈴の音をはづしけり
積んだ本読めるつもりの梅雨曇
万緑やヨークシャテリア良き糞す
夕焼は少年と犬なでてゐる

所沢　関根千恵

口紅をほんのり指して入学式
目薬やあふれて頬に春の星
春星や客を迎ふる鬼瓦

さいたま　落合和枝

我が友よ影ひとつ引き春日向
膝触るるセーラー服や菫濃し
叶ふなら東風に放たん伝書鳩

大阪　飯塚智恵子

種芋や庭の二畦を母が植う
母子草踏んでごめんと手を合はす
春雨や相合傘の詣で道

さいたま　安藤みえこ

日光浴ねむる種芋起こしけり
山笑ふ私ほんのり色を染め
コロナ減り街角に春笑顔増え

川島まり子

種芋を大事に使ふ老後かな
山笑ふ流るる水の透きとほる
山笑ふコロナの痛み薄れゆく

山川　順

散歩道心も弾む犬ふぐり
ひらひらと紙飛行機や風光る
夕空の水辺ゆらゆら風光る

春日部　増田静司

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰　山本鬼之介

［指導者］　網 野 月 を
［作　品］　５句　［受講料］1,000円（今月から５句）
［方　法］　①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記
③ 84円切手を同封
④返信用封筒は 不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］　網 野 月 を
〒336-0025
さいたま市南区文蔵１-13-3-401
電話 048－862－5926

作品評

山本鬼之介

掛茶屋に電車の絵本山笑ふ　　染谷正信

この句は、「掛茶屋」という一見古風な商い店と、その店に置かれている「電車の絵本」との妙な取合せの謎を解こうとする読み手の気持を捉えるところから始まるのだと思う。

掛茶屋は、時代劇ドラマなどでよく見掛ける路傍に葦簀などを立てかけて旅人に茶や団子などを供する店のことで、今でも祭や縁日、観光地などで見掛ける光景である。

さて件の絵本の存在理由を考えると、①この店を親と訪れた子供が置き忘れたもの。②子供の客のために店が用意しているもの。③店の販売品。という三通りの答が導かれるが、季語の「山笑ふ」から推察してこの店は観光地のものと思われるので、答は③であると思う。時代がかった雰囲気の中に近代的な具象物を添えたことで魅力ある俳句に仕立てている。

朝霞ゴルフコースの遠き声　　反町　修

「ゴルフコース」多少ともゴルフを経験した人ならすぐ解るゴルフ場特有の叫び声である。ゴルファーが、フェアウエイから大きく外れるような危険球を打ってしまった時に、キャディーや競技者が、『ファー（ｆｏｒｅ＝前方）』と、前方や隣のコースにいるゴルファーに大声で危険を知らせる。今日は生憎のコースコンディションで、朝から霞が立ち籠めている。その霞を切り裂いて、遠い後方からこの声が届いてくる。他人事ながら、自分も失敗しないようにと気を引き締める一瞬である。季語を活かして扱いの難しい題材を上手く詠み熟したナイス・バーディーの俳句である。

蛤の幽かな吐息夜の静寂　　原田秀子

少々の塩を容れた金盥に蛤を移して砂抜きをする。暗い所に置いておくと、その内に蛤が少し口を開き、小さな気泡が上がってくる。筆者も幼少の頃、この泡を見たさにそっと貝の居る盥に忍び寄り、何か秘密の行動をしているようなわくわく感を覚えた記憶がある。初恋に心を焦がす乙女のような「幽かな吐息」が実に佳い。

陽炎に憑かれ遠のく赤い靴　　曲淵徹雄

陽炎は、逃水と同様に神秘的な春の自然現象で、例句を見てもその雰囲気を備えたものが多い。さて、本句を平面的に

解釈すると、「赤い靴を履いた女性自体から陽炎が立っていて、その女性が作者の視界から次第しだいに遠ざかって行く」ということになるが、筆者としては、野口雨情の作詞による大正時代の歌『赤い靴』の少女像が作者の発想の根底になっているように思えてならない。句の中の「憑かれ」と歌詞の中の「異人さんに　つれられて　行っちゃった」とが、いみじくも重なって来る。異次元を感じる奥行のある俳句である。

陽炎や真つ赤なポルシェ浮いて去る　横山君夫

自動車の情報に疎い筆者でも、「ポルシェ」がドイツの高級スポーツ車として有名であることは承知している。たまに街で見掛けることもあるが、真っ赤なポルシェとなれば、かなり目立つことだろう。陽炎の立つ道路を走るポルシェからも猛烈な陽炎が立ち上り、まさに「浮いて去る」の表現がぴったりの臨場感が伝わってくる。

遠離るほどに明るき花辛夷　加藤でん治

小柄な花を沢山つけた辛夷の大樹であろうか。近くで見るのとは違って、離れてゆくほどにその樹全体の花の明るさが増してゆく。当然のことでありながら、作者の眼にはその樹が魔法を使っているようにも見えたのだろう。絵画的な意匠を凝らした作品と見た。

料峭や青果市場の糶滾る　保坂翔太

野菜や果物などの青果物を扱う青果卸売市場は、全国に90箇所近くあるそうで、鮮魚卸売市場と同様に、専門用語による糶声で朝を迎える。筆者は、岩槻市の城址公園の近くにある青果市場を通りかかり、中を覗いたことがあるが、残念ながら糶が終っており、体験することが出来なかった。本句の季語によって、肌寒い早朝の空気を切り裂く糶声が迫ってくるような気がする。

思ひ出は暗渠にかくれ水温む　渋谷きいち

東京都内は勿論、周辺の都市にあった小川が姿を消し、暗渠と化してその上が遊歩道になった処が多い。昔の清らかな小川に、戦後の高度経済成長時代の宅地造成に起因する生活排水が流れ込み、どぶ川化してしまったので暗渠化も止むを得ない仕儀であったかと思うが、唱歌「春の小川」のような菫や紫雲英、目高や小鮒も姿を消してしまい、遠い遠い想い出だけになってしまった。高齢者以外の年齢層には、想い出すら存在しないのだ。朝の散歩で暗渠の上の遊歩道を歩きながら、むかし遊んだ小川を思い出し、水の温みを感じている。

紫雲英摘み畦の仏に首飾り　新　暦文

久方ぶりに故郷を訪れたら、昔のままの紫雲英田と畦道の

野地蔵が現存していたとしたらどんな気持になるのだろう。きっと昔遊んだ時と同じように、ごく自然に紫雲英を摘んで首飾りを作り、お地蔵様の頸に掛けると思う。遥かなる郷愁を呼び込む俳句である。

浜で焼く大蛤の呵呵大笑　越田栄子

獲ったばかりの大蛤を浜辺で焼いている様子がリアルに詠まれている。固く口を閉じていた貝であるが、直火の熱さに堪え切れず、ぶくぶく汁を噴き出して辺りに香ばしい匂いを漂わせている。まさに残酷極まる人間の行為であるが、下五の呵呵大笑の言葉に救われた思いがする一句である。

父と子が寝転び空をげんげ畑　塩野久子

蓮華草の花が咲き乱れる畑で、父と少年が大の字になって空を見上げている。学校や友達の話、将来への夢など、日頃の思いを語る少年。そして、父が少年の話に頷いたり時々意見を述べたりして穏やかな時が流れて行く。風に乗りゆっくりゆっくり動いてゆく綿雲を眺めながら、二人にとって心の安らぐ時間が過ぎてゆく。少年にとっては想い出に残る一齣であり、また、父にとっては、多感な子の親としての充足感を味わう貴重な時間なのである。

麒麟なら見ゆる巨木の木の芽かな　鈴木和子

大人の麒麟で体長が5メートルほどなので、かなり高い木の上の葉を50cmもある長い舌を使って食べることが出来る。麒麟が、高所にある木の葉の状態をいちいち確認しているとは思えないが、若葉を旨そうに食べている様子を想像すると、この俳句をより身近に感じることが出来る。

うららかや白磁の白の限りなし　丸屋詠子

中国の北斉時代を起源とする白磁は、朝鮮の李朝へ、その後16世紀に日本へ、また、欧州のマイセンへと伝播したようだ。句の趣から推察して、この白磁は、しかるべき美術館の展示コーナーか美術工芸品を扱う名店の陳列ケースに収められたものであろう。その場を離れて戸外に出た時、うららかな春の陽射しの中に、遥かな時代へ自己を誘う白磁の姿が映し出されたのだと思う。なかなか切れの佳い俳句である。

揚雲雀精魂こめて独唱す　村杉清吉

真っ直ぐひたすら天を目指して駆け上り、頂点に達するや堰を切ったように真っ逆さまに地に還る雲雀の生態は、観ていて興味津津である。昇って行く時の必死の囀を、見事に表現している。

それぞれの人に十年菫咲く　日高道を

タイミングとして、今年三月十一日に満十年の忌日を迎え

た「東日本大震災」をテーマにした俳句と思えるが、広範囲で内容の込み入った災害の経緯を思う時、まさに「それぞれの人」が的確な表現であると思う。菫という可憐な花を共通項にしたことが成功していると思う。

また、「十年一昔」という言葉を生かして読んでみると、右のテーマとは別の物語が展開するような気がする。

カステラの底の甘さよ春の雨　野田静香

掲句の「底の甘さ」とは、カステラを載せてある紙の上に付いているザラメ糖のことであろう。即ちカステラの底の部分に相当する。室町時代末期にポルトガル人によって長崎に渡来したカステラは、江戸時代になって材料の配合や製法の改良が進み、長崎カステラの原型が確立したようだ。

さて、カステラの底になるザラメ糖は何のためにあるのか。発端は、江戸時代に長崎から京都や江戸までカステラを運ぶについて、防腐剤として用いたと言われている。今はその必要は無く、カステラの生地に混ぜ合わせて焼いてしっとり感を付加するのが主目的のようだ。融けきらずにカステラの底に残ったザラメ糖がその正体である。東京の築地に文明堂の工場があり、筆者がそこを通った時、排出される砂糖の匂いに噎せ返った経験がある。春の雨が止んで、辺りに湿った大気が充満している午後のことであった。

つちふるや吾が傾城の寝姿を　青木鶴城

「傾城」の意味は「美女」「遊女」であるから、「吾が傾城」をどう解釈するかでこの句の価値が変わってくる。季語が漂わせている雰囲気から考えて陰りのある女性像を描いてしまうが、案外妻のことを格好良く詠んでいるにすぎないのかも知れない。それとも……。

永き日や海を渡つてゆくピアノ　石川理恵

重量感のあるピアノが海を渡って何処かへ運ばれて行くという内容に注目した。日本国内の引越し荷物の一つか、もしかして海外への荷物か。輸入されるピアノかも知れない。海と行っても船とは限らず、飛行機の可能性もある。いろいろ考えても結論に達しない。うがった見方をすれば、ピアノ曲さらにはピアニストを意味しているのかも。解明出来ないが実に魅力のある俳句である。

辛口の酒を一献義士祭　山中いちい

四月一日から七日まで、赤穂義士ゆかりの東京都港区高輪の泉岳寺で開催される義士祭である。吉良邸討入りの際に、灘の銘酒「剣菱」を振る舞い、義士一同の士気を高めたという。作者も辛口一献で大いに奮い立ったことであろう。

水琴窟

（水明集四月号鑑賞）

池田雅夫

日章旗掲げ初日を拝みをり　本橋稀香

かつては祝日祭日を旗日といって国旗を掲げ祝ったものだが、現在はほとんど見られなくなった。マンションなどの集合住宅では掲げる場所もない。仕来りを重んじ厳かに迎えた正月。初日に手を合わせ一年の幸せを願っているのだろう。

稜線に雲の花咲く寒落暉　山岸弘子

一年で最も寒いといわれる寒の時期。こと関東地方では空気が乾き、放射冷却でさらに気温が下がる。屋根の上に浮かぶ雲を紅く染めて陽が沈む。日没後の暗さに反比例するかに浮き雲が太陽に照らされ、幻想的な風景を醸しだしている。

待つ母に帰れぬ訳を初電話　山戸美子

正月には帰省して母と過ごしていたが、今年はコロナ禍で帰ることをやめた。楽しみに待っていた母に、帰れない訳を長々と説明しているのだろう。独り暮しの親であるならばさぞかし寂しい正月であったことだろう。せめて電話でも。

高速の光芒一閃冬の暮　武田重子

「光芒」は、尾をひく光の筋。放射する光のこと。また、「一閃」はピカッと光ること。高速道をひた走る車のライトが一瞬眩しく目にとびこんできた。カーブであろうか。その瞬間の臨場感が伝わってくる。「冬の宵」が相応しいかと。

きこえくるのこぎりの音山初め　加藤ナヲ子

林業が盛んなころ、山始の儀式は重要であった。山の神に餅や米を供え、順調な山仕事を祈るのである。大きな鋸を引き木を伐り出す。大自然の中での暮らしぶりが見えてくる。

凧揚げが自慢の爺の指さばき　嶋田洋子

昔も今も凧揚げが自慢の好好爺。幼児と連れだって近くの河川敷で凧を揚げる。「爺の指さばき」と、その仕草に注目したところにこの句の深さがある。おそらく爺の手づくりの凧なのであろう。きっと高く舞い上がったことだろう。

淑気満つ目を閉ぢ触るる御神木　野村美子

「淑気」は新年に満ちる厳かでめでたい気配のこと。気をしづめ御神木に触れて、その霊力にあやかりたいと願っている。「目を閉ぢ」の行為にその面持ちが表われている。読者も目を閉じ、その心境を体験したつもりになったことだろう。

旧友のお国なまりの初電話　柳父はる

故郷を離れてから数十年。いなかの言葉をすっかり忘れてしまったという人も少なくない。しかし、郷帰りするとたちまち、いなか言葉、訛が無意識に出てしまう。新年早々、旧友からの電話。「お国なまり」が温かく無事を伝えている。

炊きたての飯の白さや寒卵　高原和子

寒中の卵は栄養価が高く、保存がきくという。朝餉の一杯は卵かけご飯で、という今はぜいたくな食事である。炊きたての白さが光るご飯と卵の黄が相対的な色調を醸している。いかにも日本人らしい食事の光景である。食べすぎに注意。

吉方に厄除け札を冬座敷　飯室夏江

「吉方」は「恵方」とも言われ、その年の干支に基づいてよいとされる方角。恵方神のいる方角である。冬らしく設えた座敷に、用心深く厄除けのお札を貼ったのだ。これで冬の寒さにも負けずに過ごすことができるであろう。

家(や)に籠るたいくつな日々春を待つ　木村るみ子

「家に籠る」に、コロナ禍を思い浮かべる。三密を避け、出かけずに家に籠もっているのだ。しかし、何日も続いたせいで「たいくつ」を感じている。コロナの終息を願っている。

針仕事ひとめひとめの春隣　福田育子

一日に畳の目一つ日脚伸ぶ、と言われるが、衣服の繕いをしている針に穏やかな日が差し込んでいる。その針先の光に春が近いと感じたのだ。「針仕事のひとめひとめや」として「切れ」の効果を活かし、「春隣」を強調することができる。

冬の鳥川面の炎となりぬ　飯塚智恵子

「冬の鳥」が炎となる情景を思い巡らすが想像がつかない。羽ばたきながら翔つ姿が「炎」に見えたのか、あるいは白い鳥が夕陽に染まって「炎」のように見えたのかも知れない。中七を「川の面の」として、五五七の破調で字数がそろう。

短日の老いの手習ひ急ぐ足　持水喜夫

趣味に興じて習いごとにいそいそと出かける老人の姿が見える。老人といっても、まだまだ家にこもるほどの歳ではなく、退職後の身の振り方は人それぞれ。対比的に手と足を使い分ける工夫が見られる。「急ぎ足」の名詞形もよいのでは。

冬うららメタセコイヤの高きこと　鳴海順子

「メタセコイヤ」は高さ二〇メートルにも及び、円錐形の整った樹形が美しい。「生きた化石」といわれ、公園樹や街路樹として親しまれている。伸びやかな枝に安心感が漂う。

網野月を　選

山紫集

ポケットからグーがとび出し花辛夷　小倉倭子
辛夷真白バベルの塔の脆さとも　梅澤佐江
風の日の辛夷ゆらゆらやじろべゑ　石田慶子
辛夷咲き次男は空のない街へ　新　暦文
柵に掛く古き蹄鉄花辛夷　内田恵子
辛夷咲き顔それぞれの六地蔵　髙橋満耶子
泣きながら女手を挙ぐ幣辛夷　瀬戸雄二郎
辛夷散る花びらの紅残りをり　菅原真理
表札は辛夷の花となりにけり　宮崎紫水
花木筆句碑を読める子読めない子　鳥羽和風
うつとりと辛夷明りに目覚めをり　十倉和子
花こぶし反りがおはこの斬られ役　曲淵徹雄

――以上特選

湯治場の渓のせせらぎ花辛夷　斎藤みよ
みちのくの天へゆく道辛夷咲く　佐々木典子
辛夷咲く坂の上なる友の家　笹本啓子
震災の海は語らず花辛夷　佐藤克之
山靴の紐結び直して花辛夷　渋谷きいち

廃校の門のみ残る花こぶし　下川光子
辛夷咲く仰げば尊し米寿なる　霜中冬至
山里へ花嫁御寮こぶし咲く　杉浦理恵
記念樹に父植ゑ呉れし花辛夷　鈴木和子
廃駅の守番務む老辛夷　鈴木藻好
辛夷咲き風土記の丘の景新た　諏訪サヨ子
花辛夷山峡今宵風も無く　関谷多美子
切り岸の秩父往還辛夷咲く　染谷正信
辛夷咲く生家の壁に水の跡　高島寛治
遊郭の面影残し辛夷咲く　田中章嘉
青空に突き出す辛夷白きかな　千坂平通
辛夷咲く拙を守りて耕せり　飛永　鼓

静けさや国分寺跡散る辛夷　外村紀子
山里の空に辛夷の笑ひをり　仲田利子
辛夷咲く背丈伸びたる子の帰る　南條きわゑ
乳呑児を抱けば同じ香花辛夷　西幅公子
谷あひの小さき廃校辛夷咲く　野口和子
病院のホールにピアノ花辛夷　野田静香
里山の辛夷堂堂空青し　野村美子
風に揺れおいでおいでと幣辛夷　野平美紗子
母と行く戴帽式や花辛夷　橋本京子
藍の里工房彩ふ花辛夷　原田秀子
辛夷咲く時の止まりし過疎の村　日高道を
粉引茶碗の白のぬくもり辛夷咲く　福田千春

グーチョキパーと解れて咲くや花辛夷　藤澤喜久
原発の汚染の地にも花辛夷　保坂翔太
辛夷揺れ空也の南無阿弥陀仏かな　正木萬蝶
薄味の煮浸し旨し夕辛夷　町野広子
満開の辛夷鉄扉の向う側　松井由紀子
分校は私雨よ花辛夷　丸山マスミ
幣辛夷里の目覚めを促しぬ　宮﨑チアキ
辛夷咲く木曾路の風に歩のはずむ　森川義子
辛夷咲く父の入院長引く間　森下美智枝
前山に簪のごと辛夷咲く　森田祥絵
辛夷立つ雲着た如く真白に　湯浅　和
婚の荷を門に入るるや花辛夷　横山君夫

蒼天に白こぶしコブシ辛夷かな　青木鶴城
女教師の若き足どり花辛夷　阿部幸代
こぶし咲く十年（ととせ）一日の底力　安倍弘夫
出羽の山法螺貝湯の香花辛夷　新井孝麿
人声も風も膨らみ辛夷咲く　荒井倶子
ひと抱への太陽を浴び辛夷かな　池田雅夫
鳥千羽が浮かせるごとく夜の辛夷　石川理恵
半生を峡に住み旧り花辛夷　井関礼子
赤ちゃんはニギニギが好き辛夷咲く　井口俊晴
夜目遠目香るや辛夷道標　上戸千津子
花辛夷純白の日に戻れずや　梅澤輝翠
秘蔵っ子の二人飛び立つ姫辛夷　大塚茂子

学舎の子等の帆となり辛夷咲く　大場順子
城跡の辛夷の力強さかな　岡野順子
蟠り解けゆくなり花辛夷　加藤でん治
花辛夷夜間飛行の空照らす　川崎道子
あらかたは鳥の御馳走花辛夷　川島典虎
窓を覆ふ辛夷咲く季よ共棲長く　河原叔子
眠り覚め辛夷未来へ立ちあがる　神田治江
十年目の鎮魂の灯よ夕辛夷　熊倉千重子
トンネルを抜けて辛夷の迎へ有り　河野はるみ
大空へ雲の白さの辛夷咲く　越田栄子
窯出しの土器の鈴の音辛夷ゆれ　後藤綾子
花辛夷入り江見下ろす津浪石　近藤徹平

花辛夷無縁となりし墓仕舞ふ　菅原卓郎
散り急ぐ辛夷車窓に転院す　山岸弘子
蒼天へささめき初むる花辛夷　井上玲子
青天をバックに撮影花辛夷　武田重子
曲屋の駒立ちあがる花辛夷　山田美佐尾
六甲の山並み染むる辛夷かな　森本早苗

☆　　　☆

山紫集作品評

網野月を

「辛夷」の季語は、形象で把握したり、春の人事に合わせて把握したり、古木となった辛夷を想定したりして把握している。これらの把握は順当であるのだが、出来るだけ新味のある、個性のある表現を考案できればと考えている。

泣きながら女手を挙ぐ幣辛夷　瀬戸雄二郎

秀逸である。上五の「泣きながら」の理由がミステリーである。果たして別れを経験しての涙なのか、怒り心頭の涙なのか、その昔出征の親族を見送る涙なのか、想像の先に永遠があるようだ。そしてまた霧がかかっているようでもある。座五の季語「幣辛夷」にそのすべてが委ねられている。季語の働きとはそういうものなのである。むろん読み手に拠って異なる読みをするわけであるのだが。筆者は、これは記憶を呼び起こした「幣辛夷」であろうと解した。この涙は悲しみの涙であったが、やがて癒されて、時を経て笑みに替わったであろうと勝手にストーリーを作って楽しんだ。そう願っているのである。

辛夷散る花びらの紅残りをり　菅原真理

散り敷いた辛夷の花びらに紅（こう）が残っているというのである。座五の「残りをり」の丁寧な言い方が「紅（こう）」と読ませるのである。秀句である。

表札は辛夷の花となりにけり　宮崎紫水

辛夷の樹齢は八十年、百年を優に超えることが出来るようだ。この辛夷は人の営みを超えて長寿を全うして、老樹となりこの家の表札代わりにもなった、ということであろう。座五の「なりにけり」に時の経過の重みを託している。

花木筆句碑を読める子読めない子　鳥羽和風

句碑の文字はなかなかに達筆である。達筆なだけに読解の難しいものもある。「読める子読めない子」に類する肯定＋否定の表現は、俳句では常套手段の様であるのだが、使いこなして成功するにはなかなかに年季の要るものなのである。上五の季語「花木筆」の表現が粋を極めている。

うつとりと辛夷明りに目覚めをり　十倉和子

中七の「辛夷明り」は将にそうなのである。花明りの措辞は頻繁に出会うのであるが、辛夷の明りはなかなかに出会えない。俳句的表現であり、座五の「目覚めをり」にぴったりと相合していて、句意を深めている。上五の「うつとり」に若干の冗漫を感じる。

花こぶし反りがおはこの斬られ役　曲淵徹雄

辛夷の花の先が僅かに反って蕾がほころび始めるその形態が斬られ役の反身に相当しているというのであろう。福本清三のことであろうか。ただこの句の意はそれだけでないのである。上五の季語「花こぶし」の春を魁けて咲く心根と真白な眩しさ、そして仄かな香を愛でる気持ちに「斬られ役」の役者根性を投影しているようだ。主役ではない脇役に人生をかけて悔いない潔さを「花こぶし」に重ね合わせている。

ポケットからグーがとび出し花辛夷　小倉倭子

突拍子もない句である。選後に作者を確認して、然もありなん、と頷くしかなかった。こういう運びの句作りは作者の独壇場であろう。

辛夷真白バベルの塔の脆さとも　梅澤佐江

実は「脆さ」を感じていないのだ。人為の「脆さ」は当たり前であろうけれども自然の「脆さ」は美に通じるし、毎年のように回帰して咲く辛夷には強かささえ認められるのである。「……とも」には作者の意図とするパラドクスが秘められている。

風の日の辛夷ゆらゆらやじろべゑ　石田慶子

辛夷の樹のすっとした立姿に弥次郎兵衛の立棒のバランス感覚を重ね合わせたのであろうか。上五の「風の……」が若干説明的ではある。

辛夷咲き次男は空のない街へ　新暦文

「空のない街」は何処の街であろうか。「あどけない話」（智恵子抄）以来、東京ということになっていると筆者は考えている。昭和三年の詩集であるから九十五年東京には空がないようだ。「辛夷の花」は迎える季節であると同時に、別れも表現する花なのであろう。辛夷の花に人生を投影することの出来るのが俳なのである。

大村節代 選

鼓笛集

城址に万朶の桜朝まだき
看護師の白衣が眩しメーデー歌
コックスは美声で美男競漕会

染谷正信

道場の弓矢放たれ百千鳥
花曇りマスクの中の鼻かゆし
新緑に日日かはりゆく四方の山

榊原聰子

一盌にみどり眩しき野点かな
みどりの日タクト振る児の燕尾服
新緑の森を揺るがすコンサート

原田秀子

青空のげんげ畑でコッペパン
膝小僧波がくすぐる磯遊び
水温み氷川の池の鯉の背

新井孝麿

翻る若鮎堰を越えにけり
美ら海を望む今帰仁風光る
十三湊の水軍の夢蜆舟

保坂翔太

亀鳴くや安閑無事の帳（とばり）より
北の地の広き丘陵花辛夷
花屑や吹き寄すらる無人駅

加藤でん治

一族につづく誕生揚ひばり
をちこちに花の浮島日暮れ谷
雨あがり山燃ゆるかの春夕焼

山岸弘子

鎮もれる池の水面を落椿
茶室へと玉砂利の音著莪の花
涌水の面の揺らぎへ新樹光

越田栄子

げんげ咲くかな女の仕草彷彿と
新しき住まひに馴染み花水木
囀や右方左方が呼応して

斉藤みよ

紀州路を駆け抜く聖火春の風
花ふぶき子供歌舞伎のりりしさよ
春の月「おしん」と天寿まつたうす

髙橋満耶子

花びらが舞ひ込む法事夕間暮れ
うららかや翁ベンチで将棋さす
天をつくスカイツリーを桜越し

森下美智枝

雛の部屋不意に鳴り出すオルゴール
幼な子の手窪にあふる雛あられ
吾子よりも祖父母の笑顔雛まつり

細井良子

炎天や一糸乱れぬ捧げ銃
衛兵の兜に映る夏の雲
オートバイ溢るる道や黄金虫

田中泰子

山奥の落人の里風光る
春眠の窓辺の朝日心地好し
春の浜小さな海星に寄せる波

野村美子

母見つむ稚児の笑顔さくら草
犬の背に残花ひとひら土手の道
平城山の木々に紛るる山桜

仲田利子

帰省子の土産抱へて凱旋す
老いてなほ余熱ふつふつなかまど
夜神楽や太古の夢継ぐ男衆

佐藤克之

散りゆきて猶も絢爛八重桜
口笛を吹く紫雲英田に寝転びて
汚染水コロナ禍五輪春闌けて

関谷多美子

献杯のアップルソーダ春の風
花籠の届きし宵や春満月
マスクケース贈りマスク贈られ三月尽

山口韶子

鼓笛集の書き方

○二百字詰原稿用紙をお使い下さい。
○俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
○右上欄外に「鼓笛集」と朱書きして下さい。

編集部

鼓笛集作品評

大村節代

コックスは美声で美男競漕会　染谷正信

隅田川をはじめとして、各地で行なわれるレガッタ。スマートな艇には八人の漕手が並び、九人目のコックスは漕手に向い合って坐る。コックスは艇のペース配分やチームワークのために絶えずコールする。只でさえスマートなボート、そのコックスが美声で美男とは、何とも絵になる景が広がる。

近づく艇に、河岸の見物者の声援も一段と高くなろうというものである。

新緑に日日かはりゆく四方の山　榊原聰子

初夏になって、若葉の柔らかい緑に囲まれた山々は、やがて深い緑におおわれた逞しい山となる。掲句は晩春から盛夏へと移り変る山の様を、客観的にさりげなく描写している。

こうした景を町場の者が詠むと、どこか嘘っぽくなってしまうのではと思う。

みどりの日タクト振る児の燕尾服　原田秀子

みどりの日は、昭和天皇の生誕された四月二十九日であったが、二〇〇六年から五月四日に変った。そのみどりの日には、目抜き通りで鼓笛隊のパレード。公園等では、子供から大人まで、合唱や合奏等の楽しい催しが行なわれる。そんな折に燕尾服を着て指揮する児の懸明な姿に、拍手が鳴り止まない。何時になったら、こうした日々が戻るのであろう。

コロナめ！

鼓笛集巻頭（五月号）

私の好きな一句（自句自解）　笹本啓子

窓の辺の灯を消して今日の月

今宵は中秋の名月、芒を飾り団子を供え美しい名月を愛でても心は何故か満たされない。それは長年連れ添ってきた夫が傍らに座って居ないからかも……。月を愛でながら、色々語りあった事が走馬灯のように浮かんで来る。

しかし､灯を消して月を眺めていると何処からか「前を向いて歩いて行け」と言う夫の声が、聞こえたような気がした。

句集喝采

近藤徹平

◆松浦加古「探梅」

本阿弥書店

著者略歴　昭和九年東京都生。同四十八年「蘭」入会、野沢節子、きくちつねこに師事、平成二十一年「蘭」主宰、同二十八年同名誉主宰。句集『谷神』『這子』既刊。俳人協会。

探梅やこの一輪に出逢ふため
はるかより風来つつあり柳の芽
終焉記しぐれの音の中に読む
葛落花踏めよと道の続きをり
つたなさを味はひとして筆始
鳥帰る両の翼のあるかぎり

第一句は句集の巻頭句でかつ表題句である。著者は「あとがき」で、「寒さの残るころに咲き出す梅の清冽さ潔さが好きです。中国伝来の梅花を喜んだという万葉時代を偲び、さらに有史以前の日本人の先祖にまで思いが飛びます」と記す。第二句のはるかは未知の国なのか。第三句の終焉記は先師のものか、筆者の執筆中のものか不明だが、俳句の世界が多くを占めるに違いない。第四句、葛紅葉は真に美しいが葛落葉も楽しむべし。第五句、悪筆も他人から見れば個性として評価されるはず。第六句は梅の清冽さから有史以前の日本人にまで及んだ思いが、鳥となって時空を超えて地の果てまでにも及ぼうとする。著者の終焉記は遥かまだまだ先と拝察した。

◆迫口あき「玉霰」

青磁社

著者略歴　昭和八年広島市生。平成四年「さいかち」入会、田中水桜に師事、同十四年「太陽」創刊同人、務中昌己、後に柴田南海子に師事。『罔象（みづは）の子』等三句集刊。俳人協会。

ゴッホの眼涼しき狂気放ちをり
薔薇の名はモーリス・ユトリロ頷けり
リラ冷えやフジタ語るに紅茶濃く
被爆青桐父の背、ガラス片無数
魂魄ゆらゆら爆心地のアスファルト
落魄の歌人は貴種よ玉霰

「太陽」柴田主宰は、帯に第一句を掲げ「著者は眼前の写生に終わらず、素材の感動を体内の膨大な知識、新しさへの探求心の襞を何度もくぐらせ、唇にのぼってくる言葉を一行詩に綴る」と評する。第二句は波乱の生涯と個性的な画風で知られる画家の名を冠した人気の薔薇を詠んだ句。第三句は戦時中の画家達の活動への批判を一身に背負い日本を去った藤田嗣治を淡々と詠む。第四句、第五句は著者の出身地広島で遭遇した過酷な原爆被害を俳句への探求心の襞をくぐらせて昇華させた句。第六句は表題句、著者は「佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」を鑑賞した際に詠んだ句と記す。筆者は落魄の歌人の一人に「花の色は移りにけりな」と世の無常を詠み、能「卒都婆小町」の残る小野小町を想像したがいかがか。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境　延昭　報

春の夜鳴らしたものよ六本木　理恵
本流へ水に遅れて花筏　順子
開かれし本に瞬く春の星　チアキ
洒落本に薄き紗かくる霾ぐもり　由紀子
春風に標本の蝶飛びたさう　節代
閲ぎあふ潮の間合や桜烏賊　喜恵
珍本を開くときめき春の夜　光弥
――以上特選
老舗三代本所下町桜漬　喜恵
本棚の埃に咽ぶ万愚節　はるみ
園児等の飛び出す絵本風光る　順子
ランドセル本かたかたと入学児　稀香
摑む手を疎み花烏賊紅を注す　由紀子
花烏賊や息今生の墨少し　光弥
古本をちらり立ち読む春日傘　治子
読み聞かす本に手擦れや暮の春　和葉
桜烏賊沖に小舟の見え隠れ　マスミ
桜烏賊指で腸抜く漁師妻　延昭
花烏賊や親の皿まで喰ふ少年　徹平
花烏賊を囲み飛び交ふ糶の声　節代
花烏賊の臭ひのこもる漁夫の家　チアキ
上司の唄は一本調子花の宴　理恵
花烏賊を私好みの味付けに　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映　報

蒲公英や渡来の末裔（すゑ）のそこここに　いちい
日が射せば照る葉透ける葉穀雨かな　〃
七十の口を尖らせ絮毛吹く　竺仙
下町の路地はおだやか花大根　玲子
掘り返す土の匂ひも穀雨かな　〃
消去せし未読のメール忘れ霜　みどり
――以上特選
ぜい肉の始末に負へず山笑ふ　敏江
野末まで試す健脚風光る　玲子
朝刊と先づ一服の穀雨かな　昌弘
園服の色めき立ちて穀雨かな　鶴城
縄文の命引継ぐ穀雨かな　峰雄
伸ばし過ぎる亀の首にも穀雨かな　登志子
源氏豆諸行無常の春を食ふ　竺仙
半坪の野菜にやさし春の雨　禮子
ぬかるみに足をとらるも義士祭　寿恵
日の暮れに土を払ひて穀雨かな　いちい
白蜜と黄粉墨堤の蓬餅　みどり
見晴るかす一面アートの芝桜　絹映

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

故郷の闇やはらかき遠蛙　喜久
色里に目覚めし殿様蛙かな　〃
春の鳶ま昼の月に舞ひ唄ふ　徹雄
東京都檜原村の夕蛙　萬蝶
香炉の灰ならす夕べの初蛙　祥絵
消灯の窓に残像遠蛙　雅夫
遠山の落暉を囃す夕蛙　昇
――以上特選
饒舌な蛙に水のビブラート　喜久
ふつと笑む産湯の赤子遠蛙　大場順子
蛙の受難覚めれば田無く仲間無く　理恵
春の風托鉢僧に纏ひつく　徹雄
木の芽和へ西に東に五山あり　萬蝶
蛙鳴く畦道ぴよんと飛び越えて　岡野順子
兄在らぬ無聊の夜の遠蛙　康世
のどけしやインコが餌をくだく音　祥絵
分校の複式授業初蛙　雅夫
遠蛙足湯に分かつ笹団子　昇

第四例会（浦和）

境　延昭
石井喜恵　報

三面鏡の写す三面花衣　順子
亀鳴くや埴輪は口をあけしまま　〃
染め付けの蝶舞ひ出でむ花衣　由紀子
城下町に馴染む歩幅の花衣　マスミ
亀鳴くと拾ふ補聴器求めたり　でん治
亀鳴くや判読できぬ古代文字　恵子
亀鳴くや古酒泡盛の酔ひ心地　昇
耳さとく亀鳴く夜の雨の音　喜恵

——以上特選

なけなしの一張羅なり花衣　寛治
亀鳴けり森の魑魅（すだま）と遊びをり　マスミ
撫で肩をすべるむらさき花衣　順子
亀鳴くや鈍行列車の旅鞄　暦文
菩提寺の井戸には蛇口亀鳴けり　光子
亀鳴くや列車待つ間の無人駅　でん治
花衣うす紅色の貝釦　延昭
亀の鳴く背伸びしてゐる道祖神　恵子
吉野山旅の名残の花衣　玲子
花衣ぬぎても暫しはな浄土　光弥
潑剌と袴姿の花衣　修
亀鳴くや観光バスの客十人　翔太
花衣スカーフ巻いて異邦人　治郎
喪心の薄れゆくごと花衣　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ　報

昭和史の思ひ重なるみどりの日　水尾
詩（うた）を追ひ逃水を追ひ八十路かな　玲子
からつぽの回転木馬緑の日　美佐尾
それぞれの昭和を語る緑の日　義子
逃水に靴濡らしゆく少女らよ　佐江
逃水を追ふは理無（わりな）き恋に似て　〃
風そよぐ苑の八橋みどりの日　〃

——以上特選

逃水の逃げ切るカーブ伊豆の海　水尾
逃水やマジック見せしアスファルト　理恵
日の丸の折目正しき緑の日　義子
木に耳をあて水の音緑の日　美佐尾
カルテット奏づる小鳥みどりの日　玲子
鉢植ゑを二鉢買うて緑の日　はるみ
良き風よ草の匂ひよ緑の日　佐江

若松例会（京橋）

石田慶子
正木萬蝶　報

思ひ出すのは後ろ姿よ桜貝　月を
真実は引出しの中桜貝　鶴城
桜貝ゆかし海なし県に生れ　千春
「さよなら」を消して去る波桜貝　はるみ
うなぎ屋ののれんのろりと春の昼　倭子
子がせがみ花見の後に花屋敷　理恵
内灘の逢瀬ひととき桜貝　萬蝶

——以上特選

春の宵これから夜になるのが怖い　月を
寄せ書きに感謝の春も身はいまだ　儀勝
潮の香の残る形見よ桜貝　倭子
果てしなき空の青さよ桜貝　佐江
おはじきの小箱にしまふ桜貝　俊晴
桜貝つり革揺るる江ノ電よ　ひろこ
大戦のことは言ふまい桜貝　鶴城
ぷよぷよの稚の爪切り桜貝　知子
桜貝亡き母の黙謎のまま　理恵
たれと拾ひしジャムの小瓶の桜貝　千春
玉砂利に昨夜（きぞ）の湿りや朝桜　マスミ
ひく波にさつと出す足桜貝　慶子
無くす度また拾ふ恋さくら貝　はるみ
打ち寄する人魚の涙さくら貝　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗　報

鳥帰る紀淡はるかに潮佛　玲子
行く春や大和国原山まろし　〃
覗き込む雲の中なる蝌蚪の国　ゆら女
各々方密避けられよ蝌蚪の池　早苗
野遊びの帰路は末の子を背に　洋子

蝌蚪の群はづるる一匹反抗期　道子
本降りとなり届きたる花見鮨　和子
——以上特選
大空を眺めてをりぬ巣立鳥　敦子
告天子地球すつぽりCO_2　ゆら女
蝌蚪の足生えて水田の目覚めけり　洋子
須磨浦の敦盛桜凛と咲く　早苗
尖塔のゴスペルソング鳥雲に　玲子
明日の事明日に任せて蝌蚪の賑　礼子
隊列ややんちやに見ゆる葱坊主　千津子
夕燕水車ひたすら粉碾いて　和子
囀に新任教師迎へらる　道子
リーダーの指示は的確蝌蚪群るる　千世子
蝌蚪生る休耕田のど真ん中　千枝子
花筏まつすぐ生きる難しさ　きわゑ
経典より這ひ出す梵字蝌蚪の群　満耶子

昔話あれこれ ——

悲劇のヒーロ倭建命（前編）

今回は皆様ご存知の倭建命のお話。
時は、第十二代景行天皇の御代
景行天皇は、大変な子福者で、八十人の子を持ったという。その中で後の成務天皇、小碓命（おうす）（倭建命）五百木之入日子（いおきのいりひこ）の三人を皇位継承者と定めた。

小碓命には大碓命という兄がいた。

ある時、大碓命は父帝から容姿端麗な兄比売・弟比売という姉妹を帝の妃として連れて来るよう命令された。大碓命は、命令に反してその姉妹と結婚し、別の姉妹を帝に差し出した。帝はその事に気づいたが、知らぬふりをしていた。大碓命は気まずかったのか、これ以来、父に顔を見せなくなった。帝は小碓命に兄に出仕するよう「ねぎ教へ覚せ（ねんごろに教えさとせ）」と申しつけた。五日経っても兄が出仕しなかったので、小碓命に尋ねたところ、「すでにねぎつ」と言った。どのようにねぎらったのかと尋ねると、「朝方、兄が厠から出てくるのを待ち捉えて手足をもぎ取り、薦に包んで捨ててしまいました。」と答えた。

小碓命の熊襲建征伐

帝は、小碓命の気性の荒さを恐れて、西の熊襲建兄弟を撃つよう命じた。

小碓命は、父帝の妹で伊勢神宮の斎宮となっている倭比売命から衣装と剱（つるぎ）を貰い九州に向った。熊襲の家では祝宴を開こうとしていた。

小碓命は、髪を乙女のように結い叔母から貰った衣装を着て花を欺く美少女になりすまし祝宴の坐に侍ると、兄弟に気に入られ二人の間に座った。宴たけなわの時懐中から剱を出し兄の胸を刺し、逃げようとする弟の尻から刀を刺した。

弟は今わの際に、「西方に我々二人より強い者はおりません。倭の国には我々より強いお方がおられたのですね。これからは『倭建命』とお名乗りなさいませ。」と言って息絶えた。

こうして小碓命は『倭建命』を名乗った。

その帰途、道々の山の神、河の神等を征伐し、出雲の国に入った。

出雲では、出雲建と盟友を結んだ。その裏でこっそり木刀を作って出雲建の刀と交換し、「刀合わせをしよう」と持ちかけ、抜けない木刀に戸惑っている出雲建を撃ち取ってしまった。こうして熊襲のみならず、出雲まで平定して凱旋した。

（つづく）　（丸山マスミ）

各地句会

神戸大池句会（神戸）

春の珍事かダブル巻頭杯を上ぐ　早苗
あたたかし便りの無きは良き便り　礼子
懐かしやその名呼びたい母子草　千津子
囀や漁港見下ろす隅櫓　玲子

水明大阪俳句会（守口）

ためらひて点く街灯や春しぐれ　ゆら女
人影もまばらな土手道花万朶　洋子
酒瓶に一枝させる花見かな　智恵子
法要へ角を曲れば花御堂　人美
夫在らば踊るタンゴよ春の月　敦子

花衣の会（浦和）

切株の年輪数ふ日永かな　みよ
ゆめうつつはるはねむたしうらうらら　みち
しづかなる今日は一人居朝寝坊　峯雄
春眠やゼンマイゆるむ時計かな　章嘉

光が丘俳句教室（東京）

うららかや肩を廻して骨の鳴る　守伊
揚げひばり黒一点を見失ひ　はる
シャガールもピカソも不可解蜃気楼　康子
杖ついて山笑ふ声に励まされ　史子
ほほばれば野の香母の香蓬餅　竜也
次のバスは一時間後よ夕雲雀　理恵

柿の木塾（浦和）

小気味よき人より太き山葵買ふ　和葉
行く春や屋根裏部屋にラブレター　節代
行く春や割れしグラスの金継を　恵子
伊豆の旅山葵に噎せし山の宿　俊晴
行く春や出潮に軋む船溜り　昇
行く春や残生ひと日ひと日減る　水尾
涙して通（つう）が賞味す山葵漬　光弥
途中下車して安曇野の山葵田へ　和子

珊瑚の会（浦和）

謎を解く糸口春のサスペンス　喜恵
影の濃き楠の風格春深し　マスミ
風はらむ帆から洋上春深む　水尾
百条の白糸垂らし雪解水　昇
春深し魔女は箒を磨き上げ　恵子
糸固く結ばれてゐる春の宮　史代
ものの芽や笑顔にひかる糸切歯　和子
嵩のなき夫の寝床や春深し　広子
貝塚の埋もれしままに春深む　和葉
春の服一糸まとはぬマネキンに　かつ子
婆作る糸切団子春深し　節代

櫟の会（浦和）

心根を頂戴致す花菜漬　彰二
食細る母喜びし花菜漬　千重子
落日や遠く梵鐘鳥雲に　裕之
母と子の秘伝のレシピ花菜漬　克之
うづ高き子の引越荷鳥雲に　朋子
湖底に魚（うを）消ゆるがごとく鳥雲に　富子
老木の全うしたる花吹雪　裕志
脇役に徹した女優花菜漬　治子

青葉の会（浦和）

春眠や少女の我に会ひにけり　美紗子
娘の恋も華やぎとどめ遅桜　真理
皆足を止め屋敷の角の遅桜　美智枝
春眠の窓辺の朝日心地好し　美子
遅桜水面に鳥の姿なく　公子
賑はひの後に凛たる遅桜　啓子
春眠に孫のささやき塾通ひ　洋子
はぐれ蜂南天の木を仮宿に　和子
地下水の涌き出る凹地春の暮　輝翠

鶴川山百合句会（町田）

小銭光る神社の小池水温む　雄二郎
北面の末と言ひ張る官女かな　月を
少女未満勿忘草に指切りす　喜久
菜を洗ふ母の背やさし水温む　史代
爪がよく伸びるなと夫水温む　広子
ピアニカの「ソ」は空の色水温む　知子
食堂の入口に干す白子かな　由美子
まだ白き少年の脚水温む　千春
猿沢の池の温みし夕間暮　萬蝶
橋渡る婚礼の荷や水温む　理恵
水温む長くなりたる立話　美千子
筆談の愛の告白水温む　玲子

りんどう俳句会（浦和）

万歩計置いてにつこり草の餅　弘夫
輪唱も掛け合ひもゐて囀れり　君夫
手にうけて四肢のやはらぐ草の餅　徹雄
曲屋の嫗が捏ねる蓬餅　翔太
囀やダムに隠れし邑有りて　卓郎
囀に合はせ奏づる鼓笛隊　寛治
三代の搗きし賑はひ蓬餅　サヨ子
子の成長願ひて搗くや草の餅　正信
吾妻橋舟待つ宵の草の餅　紀子
草餅に黄粉たつぷり母の味　典子
境内にかな女句碑あり囀れる　治子
本物の草餅だねと夫の言ふ　利子
囀りや珠にほふまで磨き込む　順子

新樹の会（浦和）

行く春や豪華列車の尾灯消ゆ　清吉
花水木門扉を閉ざす大使館　京子
蒼穹に映ゆる紅白花水木　修
花水木母と歩いて来たる道　平通
行く春を十年待ちし人のゐて　道を
山々の色を深めて春終はる　鶴城

皐月の会（浦和）

眼閉ぢ囀りさがす春の山　珪子
北の方見やる癖あり春の山　順子
春日傘いつもの道を間違ふる　紀子
春の山ワルツのごとき水車音　静香
水温み氷川の池の鯉の背　孝麿
春日傘母の想ひ出開きけり　久子
輪唱の列を呑み込む春の山　暦文
仔猫らの不法侵入通り抜け　きいち

蝌蚪の会（浦和）

貼り紙に閉店とあり紫荊　元美
古傷の痛み和らぐ花蘇芳　るみ子
紫荊すうつとすらり塚ガール　信一
釣果ゼロそんな日もある紫荊　礼子
紫荊いづれが幹か枝なるや　さち子
父母のアルバム繰るや花の雨　朝香
陽炎や詐欺かもしれぬ電話の子　ひさの
陽炎に離陸の尾翼消えゆけり　宣子
長兄の父似の声や潮干狩　鶴城
クオヴァディスドミネと叫び紫荊　月を

きざきサークル（浦和）

母の日や刺子の暖簾捨て切れず　喜代子
母の日や母の知らざる世を生きて　倶子
さざ波は風のいたづら麦青む　啓子
母の日や墓前に茶菓子時しばし　かつ子
麦青む何処へ向かふ一人旅　和枝
夕風になびく青麦匂ふなり　タイ
筑波より見晴らす大地麦青む　和子

りそな俳句会（浦和）

戌の日や添うて母子の春日傘　暦文
荒縄の朽ちし切れ端別れ霜　雅夫
誰を待つ三越前の春日傘　道を
まあ嬉しし一万歩越ゆ春日傘　建治郎
松原の富士が際立つ春日傘　勲
子と暮らす事はもう無し忘れ霜　寛治
春日傘さして男の子の照れ笑ひ　久美子
靴脱ぎて波と戯る春日傘　マスミ

若狭水明会（若狭）

菜園の農事メモ繰る八十八夜　初花
星映えて八十八夜の水田かな　和風
敗戦の目をしてもどる恋の猫　白鷺
邪魔するな猫の恋路は命がけ　冬至
泥の香の風ある八十八夜かな　保人
祖母が居て母居て八十八夜かな　鼓
センサーライト照らして過ぎぬ猫の恋　郁子
縁もらひ若狭の花鳥子三人　寛久
鍬洗ひ八十八夜の番茶かな　ことは
八十八夜農学生の大志かな　祥子
年甲斐もなく八十八夜の腕まくり　想子

たかんな俳句会（川口）

花活けにふんぞりかへる桃の花　久美子
人気なき宿の坪庭桃の花　のり子
夕闇に桃の花咲く無人駅　福美
缶蹴りの缶がまだ見え夕永し　小麦
夕永し我に門限無かりけり　勢津子
甲斐駒の麓は桃の花浄土　義子
白よりも緋の色が好き桃咲けり　鈴木和子
ひと駅を乗り越してみる遅日かな　鶴城
憂ひあるラジオの声や夕永し　真知子
一憂の去れば一憂桃の花　水尾
釣り人を眠りに誘ふ遅日かな　静香

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

さくら貝硝子の瓶に異国文字　延昭
雨上がり地上五寸を紋黄蝶　千恵子
北京発国際便や春の塵　俊晴
ほんたうの空を見つけむ揚雲雀　正信
春惜しむ何時か会食合言葉　淑子
土筆みな宇宙を目指す形して　倶子
雲雀野のぽこんと落ちる牛の糞　美枝子
沖つ波遠流の島の桜貝　昇

水明鬼石句会（鬼石）

句碑の道くまなくこぼれ桜かな　和子
入学の制服姿おとなびし　聡子
柿若葉たつたひとりの小学生　ナヲ子
花筏即かず離れず古き友　洋子
村寂びて風に人恋ふ葱の花　紀子

野ばらの会（浦和）

山陵の囀聞くも旅情かな　治江
囀や兜太にひびけ総持寺　茂子
をしげなく春泥つけて地場野菜　秀子
早天の雀囀る目覚めかな　和子
ためらはず春泥直進三輪車　夏江
囀りや高き産声厩より　栄子
春泥をそろりと久の里帰り　みき子

ミモザの会（横浜）

拾ふたびに逢ひたくなるの桜貝　萬蝶
野遊びや母の呼ぶ声しらんぷり　史代
初蝶のひらひら回るシャツ花柄　慶子
行く春や何だかんだの五十年　亜弥子
ランドセルしよつてしりもち一年生　栄子
花辛夷門を叩きし英会話　由美子
春の宵目刺とジャズで盃重ね　知子
「あのね」吾子の尽きぬ話や春の夜　玲子
裕次郎が居さうな波止場春の宵　千春

若鮎句会（浦和）

肩ぐるま残花へ伸ばす小さき手　さなえ
バスを待つ私だけの残花かな　稀香
城跡に残る石垣残花かな　幸代
花まつり問ひの答へはあるがまま　順
新しく咲く花あれば残花あり　夕峰
我が胸にあかり灯して復活祭　香音子
赤児泣く畷に舞ふは残花かな　喜夫
残る花一瞬にして風の中　亮一
花筏水に行き先問ふてみる　みえこ
石段に空半分の残花かな　万美
去る人を送る夕べの残花かな　芳江
残花なほ心の襞に刻みしむ　月を
残花散る路肩に雨の雫かな　鶴城

芽吹句会（浦和）

劇中の熱き抱擁うらけし　富子
ぶらんこを漕ぐよ心に鈴鳴らし　玲子
琴の音が眠りを誘ふ春の昼　修
ぶらんこを漕いで捨て去る孤独感　チアキ
春昼の蔵の薄闇より応へ　ひろこ
滑りゆくフェリーよ春の山中湖　千重子
春昼やゼロ番線の発車ベル　道を

円卓の会（浦和）

春風や富士吊り上ぐる熱気球　静香
制服の校章きらり花水木　翔太
延々と色を重ねし花筏　輝翠
字余りを削る消しゴム春愁　道を
春北斗海風やがて浜風に　月を
ビキニ忌や火神は罪を深くする　鶴城

俳句の手ほどき（岩槻）

草笛や土手を親子の肩車　延昭
ああ人生春の川よりひばり節　倭子
名を変へて流るる川や花林檎　佐江
滝となる前の静けさ花筏　ます美
川面染めゆく桜花びらファンタジー　慶子
エアメールポストに落とす花の昼　水尾
隅田川花吹雪浴び佃煮買ふ　美佐尾

沈下橋越ゆる大河や花うぐひ　義子
落武者の先祖の越えし木の芽坂　徹平
微笑する双子の少女流し雛　翔太
彼の岸に立ちて見たきや涅槃西風　忠男
駆け上がる子にやはらかく土手青む　幸代
川沿ひの桜並木を一万歩　美子
限界といふ集落や春ともし　卓郎
踏青や橋なき土手をどこまでも　かつ子

繭の会（浦和）

奥山の庵見守る残花かな　信一
春山にたなびく雲や真二つ　和代
雲雀声雲の中から急降下　孝男
蜆汁その一粒に命あり　悦子
元気沸く鍋音今朝は蜆汁　文子
境内の残花の歩道頬ゆるめ　トエ
残花には残花の矜持夕映える　月を
叢雲や吸ひ上げられし花吹雪　鶴城

あゆみの会（浦和）

女性誌の表紙の笑顔春爛漫　和
朝寝して夢はセーヌのパリジェンヌ　重子
遅刻の訳を考えてゐる朝寝かな　圭子
古書店の主の欠伸春長くる　朋子
朝寝して鳥の声に目覚めけり　山遊
大朝寝起こす一声「起きなちゃい」　藻好

水明熊谷句会（熊谷）

正直に生くる余生や春深し　治江
正論は時に悲しや朧月　栄子
道草の園児のみやげ花なづな　徹平
あぜ道の薺花見て田の準備　正行
小ブーケの中に堂々花なづな　和子
トルソーの傍にピンクの春日傘　秀子
かたむけて吾をさけゆく春日傘　燈女
背を正し哲学の道夏どなり　茂子

水明小川句会（小川）

口あけて夢が逃げてく春炬燵　みや
小流れにリズム乱れて花筏　きよ子
満開の花見酒よし日和よし　綾子
菜の花や黄の帽子ゆく通学路　栄子

櫻蔭句会（浦和）

竹竿から飛び出してくるはつ蛙　美智枝
やせ蛙生まれし池や炎天寺　道子
うす紅のもの咲きつくし春深む　由紀子
春深し木々のこずゑに空のぞく　千恵
春深し綿毛ふはりと今日の道　真理
鍬を背に母子家路の夕蛙　公子
殿様蛙古刹の池を知り尽くす　茂子
越し来たる夜の食卓遠蛙　多美子
乳飲み子の重たくなりて春深む　幸代

芙蓉句会（浦和）

リハビリやうららかなれば皆笑顔　正子
花曇り間近に迫る昼の火事　道子
うららかや乗客ひとりの路線バス　税子
うららけしジョッキの泡を鼻につけ　仁
春うらら「暇で暇で」と電話来る　美子

雛の会（浦和）

珈琲に散らすシナモン花曇　喜恵
石段に桜吹雪や夫かくす　輝翠
地の息吹水の息吹や花ぐもり　チアキ
花曇り眠気を誘ふ鳩の声　佐江

桜林句会（大宮）

古草や農機具並ぶ見本市　光子
東雲にはぐれ一羽の雁帰る　知子
春の風邪夫の土産の生姜糖　光代
白粥に梅干ひとつ春の風邪　美佐尾

山茶花（浦和）

発掘の国分寺跡陽炎へり　マスミ
陽炎や水牛のそりと棚田鋤く　泰子
土堤をゆく母娘スキップ陽炎に　光子
草餅の色青々と野の香り　しず子
草餅や新二年の式放映さる　清一
遊ぶ子にかげろふゆらりかかし公園　美江子
陽炎を突つ切つて来る路線バス　綾子

和歌山水明句会（和歌山）

電車徐行千本桜に沿ふ快楽　和子
蝌蚪の群解散させる不登校　道子
パラグライダー花に煽られ失速す　千枝子
鴨達の乗る気さらさら花筏　千世子
山桜ジグザグ降りる男坂　満耶子
桜吹雪亀十匹の甲羅干し　きわゑ
まな板も狭しと跳ねる桜鯛　洋子
花筏亀の吐息を聞きもする　廸代

水明松本句会（松本）

庭石にしみ入る雨や春の逝く　恒子
山吹の夜目にも目立つ色にして　陽子
密すぎて迷子で号泣子供の日　マリス
華やかに青空映えのライラック　玲子
春夕べ音色さびしきオルゴール　寿子

☆　☆

❖原稿募集

季音（雪・月・花）五句
水明集　五句（巻末添付用紙）
鼓笛集　三句
（編集部より依頼のあった方）
※二百字詰原稿用紙使用。右上欄外に、
季音（雪・月・花）・鼓笛集と朱書き。
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着
原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330—0064　さいたま市浦和区岸町
四—一〇—二一

水明全国大会のご案内

［と　き］ 2021年6月29日（火曜日）12：00～16：30
受付　11：30

［ところ］ 浦和駅東口パルコ９階第15集会室
ロイヤルパインズホテル浦和からパルコに変ります。

［行　事］ 水明賞・季音賞・新珠賞の授賞
新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

［会　費］ 3,000円（軽食・お茶付き）

コロナ下で、定員削減の指導により定員は先着66名となります。

66名の定員に達しましたので、申し込みは締め切らせて頂きました。

担当：全国大会実行委員会

毎月25日発売
定価1000円（税込）

月刊 俳句界 2021年7月号

特集 虚子と兜太
○虚子と兜太～それぞれの道　筑紫磐井
○虚子30句　田中亜美　○兜太30句　岩岡中正
○虚子・兜太の魅力　宮崎斗士　立村霜衣
○一句鑑賞～虚子　伊藤政美　大石雄鬼
津高里永子　小林貴子
○一句鑑賞～兜太　稲畑廣太郎　今井肖子
木暮陶句郎　阪西敦子

特別作品30句　安西篤

〈グラビア〉俳句界NOW　環順子

酒句に酔う～俳人と酒
◎酒を詠んだ名句30句　河内静魚
〈俳人と酒〉
芭蕉…髙柳克弘　其角…復本一郎
万太郎…寺島ただし　素十…稲田眸子
波郷…大石悦子　五千石…水内慶太
真砂女…鳥居真里子　裕明…山口昭男
◎酒場に集う俳人たち　伊藤伊那男

＊セレクション結社「圓」祢宜田潤市

私の一冊　植田密「生志花」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　新谷学（「週刊文春」編集局長）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

夏季競詠

（令和３年）

年一回、季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼　題「夏　野」　「夏野原」「青野」　など傍題可

「炎　天」　「炎気」「炎天下」　など傍題可

「見」（詠込み）　※夏の季語で詠む。

句　数　両題通じて五句

締　切　七月二十五日

投句用紙　七月号巻末に添付

水明夏行のご案内

【日　時】　令和３年７月30日㈮　午後１時～５時

【会　場】　本所地域プラザ BIG SHIP 東京都墨田区本所１丁目13番４号

電話　03 － 6658 － 4601　FAX　03 － 6658 － 4613

〇ＪＲ御徒町北口下車➞東京都バス（錦糸町行き）

　本所１丁目下車➞バス停より１分で会場

〇都営浅草線・大江戸線「蔵前」駅より徒歩８分。

〇東京メトロ「浅草」駅より12分

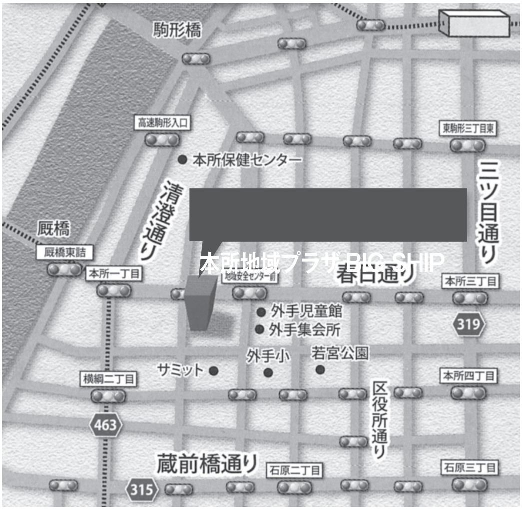
【日　時】　令和３年７月31日㈯　午後１時～５時

【会　場】　JR 浦和駅東口「浦和パルコ」９階

浦和コミュニティーセンター　第15集会室

【参加費】　第１日～第２日を通じて 2,000円
（１日参加の場合は 1,000円）

事　業　部



水明通信

思い出は歌と

寺内洋子

思いもよらぬ長期戦となったコロナ禍。特別出歩くほうではないが、出歩くなと規制をかけられると窮屈な気持ちになってしまう。

再度の図書館閉鎖もあるかと目一杯借り出し、いつも借りる翻訳物以外に佐藤愛子のエッセイを混ぜ混んだ。草刈り縄ない草鞋をつくり」という二宮金次郎の歌の歌詞が載っており、何年ぶりかで明治生まれの母を思い出した。と同時に母から「親の手助け弟を世話し」と教えられたのが「親の手を助け」だと知った。母の覚え違いかもと思いながらも、亡夫が「うさぎ美味しい」だと思っていた歌詞が後年「うさぎ追いし」だと知ってびっくりしたというのを聞き、やっぱり私が間違っていたのかもと。思い出すと、あれやこれやと浮かんでくる。特に母が歌ってくれた「読み方の本」で習ったという唱歌の数々。尋常小学校だけの短い学校生活だったから余計印象が強かったのだろうか。ずいぶんたくさんの歌を覚えていた。水師営の会見など今どき歌える人はいないのではないか。

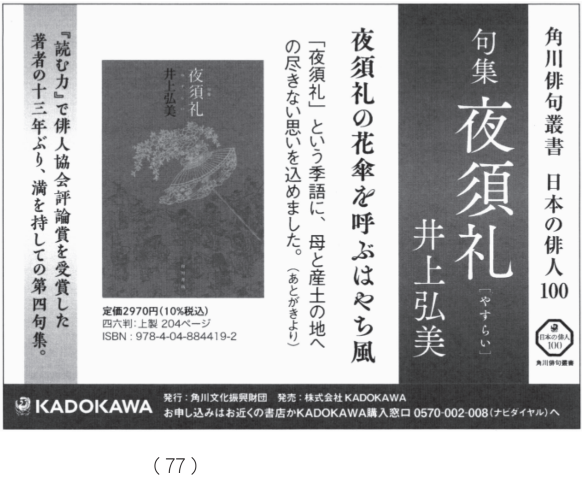
高校時代には「ここはお国を何百里」を教えてくれた社会の教師がいた。おバカな私は遅くまで反戦歌だとは考えもしなかった。ハンサムな（六歳上の姉の言によると、全校の女生徒の憧れだったとか）教師だったとしか記憶にないが、どんな思いで生徒達にこの歌を教え込んだのだろう。彼の親の代の歌のはず。社会の成績は悪くはなかったが、これは数字の上だけだったんだと今は思う。

俳句が好きに

古池恵里子

初めて投稿いたします。俳句を始めて約二年、大好きになりました。

まだまだ未熟ですが毎日歳時記を読んで勉強しております。これからも投稿しようと思います。どうぞよろしくご指導下さいます様お願いいたします。



水明通信に、俳句のこと、日頃考えていること、愚痴話、自慢話等々、何でも歓迎。どうぞ、投稿して下さい。

風声

○**俳句四季**四月号——「ステイホーム期間中につき写真で一句詠んでみました。」欄

般若経唱え蒸されて麦焼酎　網野月を

○**現代俳句**四月号——「現代俳句の風」欄

採石の跡を匿して山笑ふ　岡野順子
まほらまの平成見納め初参賀　河原淑子
前足に春光集め馬のどか　梅澤輝翠
キューポラの失せたる街や春霞　近藤徹平
缶蹴つてけつて遠のく音余寒　永野史代
どの窓も灯るアパート街朧　町野広子
満ち充つる光を運ぶ春の潮　宮崎チアキ
立春の日差しにひらく雲のドア　由良ゆら女

○**草笛**（太田土男代表）四月号——「受贈誌一詠」欄

身に余る初夢しかも膝枕　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）四月号——「受贈俳誌美術館」欄

二の堰へ向かふ水音春の闇　**鬼之介**

○**好日**（高橋健文主宰）四月号——「受贈誌御礼」欄

マスクして吾が福耳のたしかなる　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）四月号——「受贈俳誌紹介」欄

盛衰のむかしが宿る冬座敷　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）四月号——「受贈誌十一・十二月号」欄

大津絵の鬼みな愉快夜半の秋　**鬼之介**

同「受贈誌十二・一月号」欄

身に余る初夢しかも膝枕　**鬼之介**

○**太陽**（柴田南海子主宰）四月号——「一誌一耀」欄

盛衰のむかしが宿る冬座敷　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）四月号——「諸家近詠」欄

金屏風はこぶ見習ひホテルマン　**鬼之介**

○**鳰の子**（柴田多鶴子主宰）——「受贈俳誌拝見」欄

身に余る初夢しかも膝枕　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）四月号——「受贈誌の一句」欄

底晒しならぶ閼伽桶冬に入る　曲淵徹雄

（日高道を抄出）

誤植訂正

五月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

四一頁　下段後二行目

誤　葛城千代子
正　葛城千世子

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和三年四月三十日現在—

大塚茂子	5口
塩野久子	2口
秋谷信一	2口
池田雅夫	7口
原田秀子	1口
星野和葉	10口
日高道を	5口
小島喜代子	5口
岡野順子	10口
鳥羽和風	20口
熊倉千恵子	5口
佐藤克之	5口
森本早苗	10口
加藤ナヲ子	3口
森田恒宝	2口
井上燈女	5口
山岸弘子	5口
染谷正信	3口
川島典虎	2口
近藤徹平	5口
仲田利子	5口
日吉亜弥子	5口
橋本京子	6口
鈴木玲子	3口
小倉倭子	10口
匿名	20口

—合計161口—

特集 佳きかな、同門！～新作競詠
特別企画 星に願いを～七夕の一句
巻頭作品10句
伊藤政美・岩淵喜代子・大石悦子
大久保白村・岸原清行・鈴木節子
武藤紀子・若井新一

俳壇
7月号
6月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
月野ぽぽな
八木健選 滑稽俳壇

新連載
難解俳句を齧る……栗林浩
小説・遥かなるマルキーズ諸島……マブソン青眼

連載
ものがたりのある俳句……髙柳克弘
いきもの歳時記……角谷昌子
俳句史を見直す……秋尾敏

俳句と随想12か月
菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

後記

六月号が皆様のお手許に届くころには、オリンピックの開催か否かが決まっている事でしょう。
水明でも、新春俳句大会の中止に次いで、水明忌も開催を見合わせて、投句となってしまいました。そして主宰による選句と句評が当号に掲載されています。
ところで、水明に新しく入会された方は、水明忌をご存知ないと思いますので、ちらっとお知らせします。
水明は昭和五年長谷川かな女師が創立し、初代主宰となられました。昭和四四年かな女主宰が永眠されてからは「かな女忌」として修しています。尚、九月二二日に亡くなられたので「りんどう忌」と称し、掲載している歳時記もあります。その後、昭和四四年に二代目を継いだ長谷川秋子主宰は、四六歳という若さで急逝。かな女、秋子両主宰を支えた山本嵯迷師も秋子主宰と同じ昭和四八年二月に亡くなられたので、お二人を「如月忌」と称し修してきました。秋子主宰の後を継がれた星野紗一三代目主宰が平成十八年に亡くなられ「紗一忌」となりました。
こうして水明では、かな女忌、如月忌、紗一忌と年に三回も忌を行っておりました。そこへ星野光二四代目主宰が平成三十年に亡くなられ、忌が年に四回になるのは余りにも多いという事で、話し合いを重ねて、「かな女忌」以外は「水明忌」とし、年に二回忌を修する事になりました。以上が水明忌の由来です。
九月の「かな女忌」そして今年中止となった「水明忌」が来年は出来ますように、笑ってお会い出来る日常が戻ってきますように、コロナが一日も早く終束しますように、願っています。（節代）

今月のはてな？

	頁
窶（やつ）れ	15
鏤刻（るこく）	17
凴（つ）かれ	36
滾（たぎ）る	37
紫雲英（げんげ）	37
擽（くすぐ）る	40
紊（みだ）れる	42
散人（さんじん）	43
蟠（わだかまり）	59
紫荊（はなずおう）	70
盌（わん）	82
海星（ひとで）	83

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：午後１時～午後５時
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和三年六月号
通巻一〇八九号
令和三年六月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一ー一七ー一八
電話 048ー886ー六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四ー一〇ー二
電話 048ー822ー四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇ー〇ー一九二三九三

印刷所 中央美版

きりとりせん

水明集

九月号　六月二十五日締切

都市又は府県名	
氏名（俳号）	

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

きりとりせん

山紫集

九月号　六月二十五日締切

氏名（俳号）

六月の兼題

「雨蛙」（青蛙・枝蛙可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

裸婦像の反り身くつきり花は葉に　西山貴美子
遠き日の思ひほのかに牡丹の芽　波多野寿子
切り込みのある糸尻よ春深し　星野和葉
ものの芽や笑顔に光る糸切歯　茂木和子
一憂の去れば一憂桃の花　矢作水尾
新緑が喚声無人の遊園地　山中みどり
山に山重なる八十八夜かな　宇田白鷺
細き路地海に展くや桜貝　丸山マスミ
人の身の忍び音洩らす五月闇　鳥羽和風
香炉の灰ならす夕べに初蛙　森田祥絵
たんぽぽの穂絮一気に崩す愛　渡辺舎人
色街に目覚めし殿様蛙かな　藤澤喜久
鴇色の春日傘ゆくをんな坂　大塚茂子
ぶらんこを漕ぐよ心に鈴鳴らし　井上玲子
曲屋に嫂ひとり桃の花　近藤徹平
東京都檜原村の夕蛙　正木萬蝶
逃水を追ふは理無き恋に似て　梅澤佐江
囀や寝覚めの耳のこそばゆき　松井由紀子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由
枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

掛茶屋に電車の絵本山笑ふ　染谷正信
朝霞ゴルフコースの遠き声　反町修
蛤の幽かな吐息夜の静寂　原田秀子
陽炎に憑かれ遠のく赤い靴　曲淵徹雄
陽炎や真っ赤なポルシェ浮いて去る　横山君夫
遠離るほどに明るき花辛夷　加藤でん治
料峭や青果市場の糶滾る　保坂翔太
思ひ出は暗渠にかくれ水温む　渋谷きいち
紫雲英摘み畦の仏に首飾り　新暦文
浜で焼く大蛤の呵呵大笑　越田栄子
父と子が寝転び空をげんげ畑　塩野久子
麒麟なら見ゆる巨木の木の芽かな　鈴木和子
うららかや白磁の白の限りなし　丸屋詠子
揚雲雀精魂こめて独唱す　村杉清吉
それぞれの人に十年菫咲く　日高道を
カステラの底の甘さよ春の雨　野田静香
つちふるや吾が傾城の寝姿を　青木鶴城
永き日や海を渡つてゆくピアノ　石川理恵

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第１日曜・午後１時	浦和コミセン（パルコ 10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第３金曜・午後１時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第１月曜・午後１時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第１木曜・午後１時	浦和コミセン（パルコ 10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第３火曜・午後１時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第１土曜・午後１時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木萬蝶
関西例会	第３日曜・午後１時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明
令和三年六月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第六号）
定価　一〇〇〇円